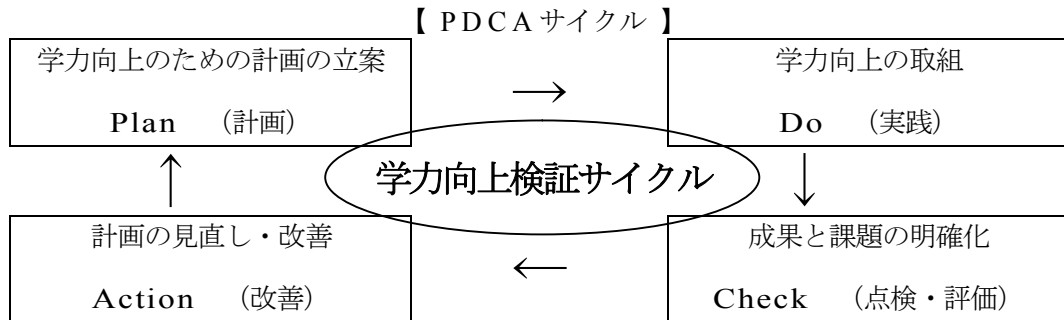


平成27年度「学力・学習状況」検証事業研究成果報告書

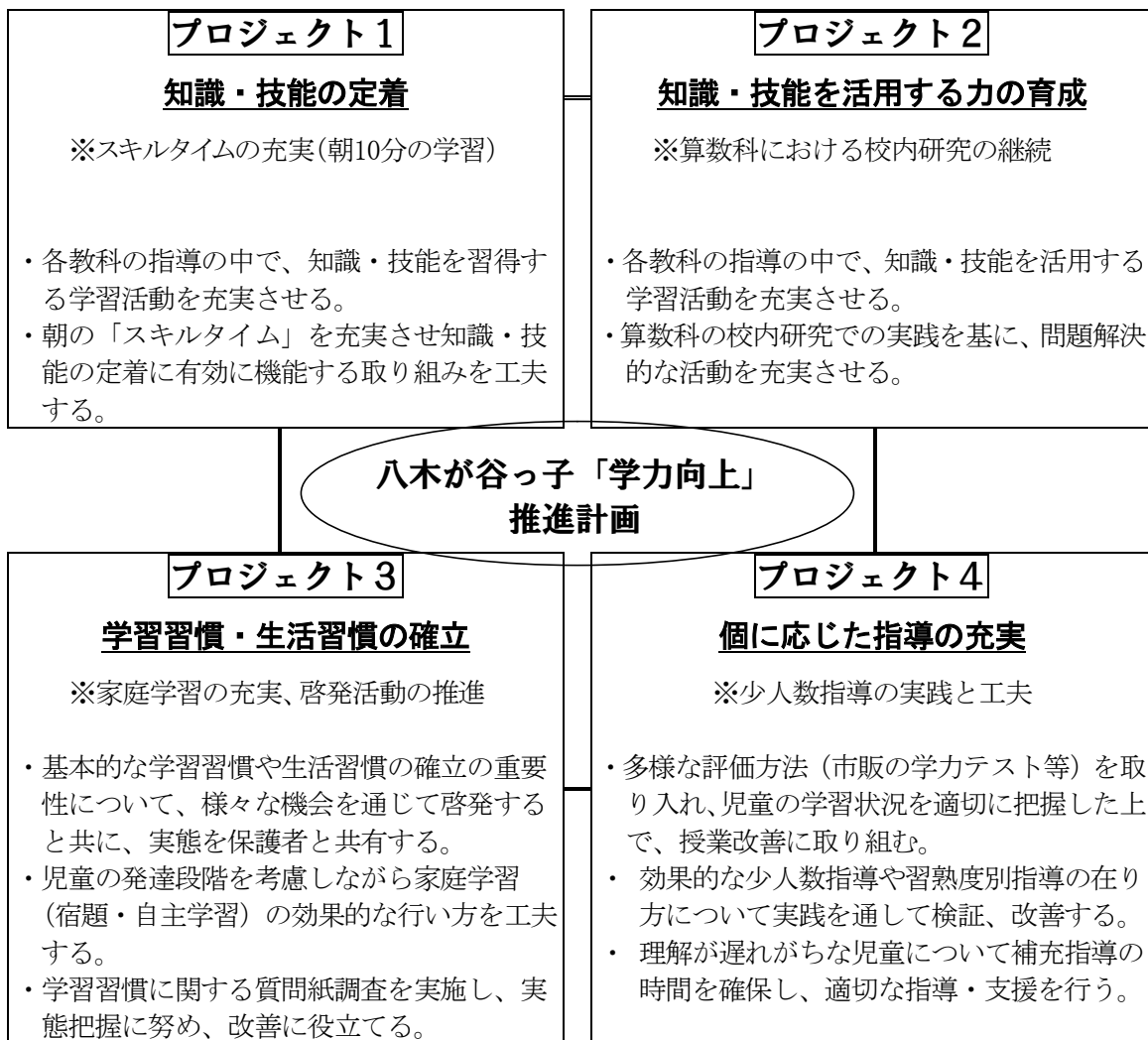
1 目的

全国学力・学習状況調査のデータ等を活用して、自校の学力・学習状況を把握・分析し、課題解決を通して、学力向上に向けた継続的な検証改善（PDCA）サイクルを確立させ、学力の向上を図る。



2 学力向上のための取組

**八木が谷っ子『学力向上』総合プラン**



**プロジェクト1 知識・技能の定着「スキルタイム」**

(1) 平成28年度の実践

基礎基本に加え活用力を身に付けるため、算数科・国語科の2教科を扱った。読書量を確保するために読書タイムを通年とし、スキルタイムはA月のみ実施した。読書タイムとスキルタイム時間は弾力的に行った。問題準備の時間省略や印刷枚数の削減のため、前学年の計算ドリルやスキルタイム用ノートを使用し行った。

(2) 朝の日課

A月 スキルタイム+読書タイム                      B月 4分間走+読書タイム

4月	5月	6月	7月	8月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
A	B	A	A	A	A	B	A	A	B	A

(3) 各学年実践内容

どの学年も「数と計算」に重点を置いて取り組んだ。3年生以上では、「数と計算」を中心に他領域も広く扱った。既習内容（前学年・既習単元）の復習を、計算ドリルを中心に問題集やスキルタイム用プリントを使用し行った。国語の学習として漢字を扱う学年が多かった。4、5月は前年度の内容の復習、6月以降は児童の実態に合わせて今年度の内容や文章問題も取り入れた。

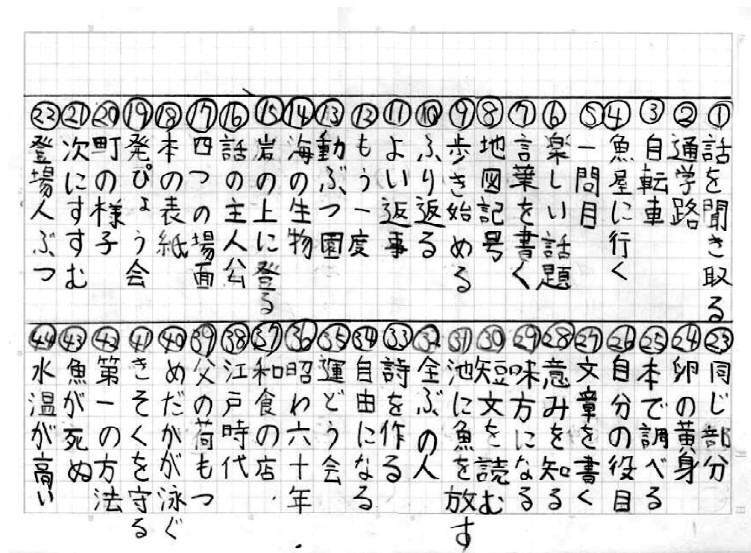
(4) 取り組み方のパターン

- ア 全員同じ問題・一斉答え合わせ
- イ 全員同じ問題・教師添削
- ウ 全員同じ問題・教師個別丸付け（机間指導をしながら丸付け）
- エ 全員同じ問題・解けた人から自分で丸付け（黒板に答えを貼る）
- オ 個別問題・自分で丸付け

多くの学級が「全員同じ問題・一斉答え合わせ」で取り組んでいた。3年生以上になると自分で丸付けする場合も多く見られた。



スキルタイム用ノート（算数）



スキルタイム用ノート（国語）

## プロジェクト2 知識・技能を活用する力の育成「校内研究」

### (1) 研究主題

子どもにわかる喜びを味わわせる授業づくり  
～算数科における説明、話し合い（言語）活動を通して～

### (2) 研究の仮説

問題解決的な学習の中で、説明や話し合いなどの表現する活動（言語活動）を中心に据え、それらを充実させるための支援・工夫を行えば、児童は学習内容を深く理解し、学習したことを身に付け、わかる喜びを味わうことができるであろう。

### (3) 研究の方法

全国学力・学習状況調査（6学年）と市販の学力テスト（2～5学年）の結果と考察  
児童の実態調査（年2回）・活用力調査（年3回）・児童変容調査（年1回）  
研究授業と日々の授業実践

### (4) 研究の重点

本校では、未習の問題を解決する際に、既習の内容を使って解決しようとするときに発現する能力を「活用力」と捉え、その育成に重点を置いて研究に取り組んでいる。研究を進めるにあたり、算数科における「活用力」を以下のように設定した。

自力解決力…考えたことを算数的な方法で表現する能力  
発表説明力…考えたことを相手にわかるように説明する能力  
比較検討力…発表された考えの中から共通点や相違点などを見出す能力

算数科における「活用力」のある児童を育てるために、単元構成の中で「活用する場面」を重点的に位置付け、活用するねらいをもった授業を工夫、改善し、「数学的活動の充実」「言語による表現（学び合い）の場」（比較検討の過程）の2点を重視して研究に取り組んだ。

### (5) 成果につながった取組

#### ①「自力解決に必要な知識（既習）と手立ての工夫により、自力解決力が向上した」

##### ア 既習の振り返り、掲示物の作成・掲示

学習の始めに既習事項を振り返り、問題中の情報と既習事項の関連を促す。単元の系統性を踏まえた掲示物を作成し、活用させることで既習事項との関連付けの手がかりとさせた。一目でわかるよう簡潔にまとめ、児童が目にする場所に掲示した。

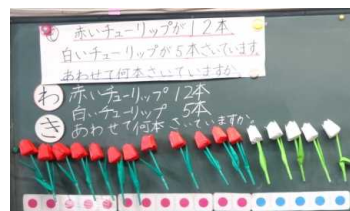


H27 4学年「面積」

##### イ 具体物の提示

問題で提示される具体物を教材として用意し、問題内容を想起させた。

また、自力解決時にどのように思考（ブロック操作）をさせたいかにより、具体物の提示の仕方を変えた。



折り紙で作成した二種類の花を用意



取り外しの可能な掲示物

##### ウ 具体物を使用した自力解決

頭で思考するだけでは解決方法を導きだすことは難しいため、具体物を操作させ、その中で解決方法に気付いていけるような手立てをとった。

低学年はブロックを使用した。様々な解決法に気付かせたい場合は、操作（切る・貼る・書く）ができる物を用意した。



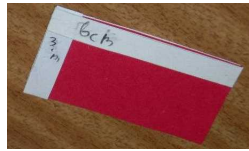
ブロックを操作しての自力解決



切ったり書いたりしながらの自力解決

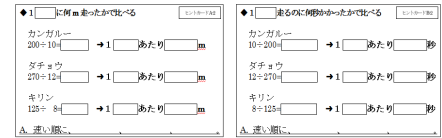
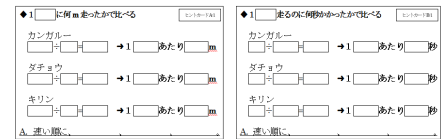
エ ヒントカード

どの児童も自己の考えを持てるよう、操作、図、表等のヒントカードを作成した。机間指導をしながら、実態を把握し、支援が必要な児童にヒントカードを渡し、一



移動可能（白の部分）が操作できるヒント

通りは自分の考えを持てるようにした。また、自己解決力を育成するため、一通り考えた児童へのヒントカードも用意し段階的にヒントカードを配付できるように準備をしておいた。



1通り考えを持った児童へ更なる考えに気づかせるためのヒント

② 「自分で解ける喜びを感じ、算数の学習の意欲が高まった」  
ア 意欲を高める問題提示

ただ素材を提示するのではなく、児童が解決してみたいと思うように話を作った。

イ 読み取る力の育成

「何算で解けるのか」を自分で判断させる。演算決定の際、根拠を持って考えられるように、理由を明確にさせた。



3学年 「あまりのあるわり算」

6学年「速さ」

ウ 3点表記「図・式・言葉」ノート指導

「図・式・言葉」で解決方法を書く習慣をつけ、考えを表現できるように指導した。

③ 「友達との交流場面を増やすことにより、発表説明力が向上した」

ア 交流活動の形態

(ア) フリートーク（自力解決時）

自力解決時、周りの友達と情報交換をする時間を設定する。自力解決に関わる内容を自席を離れて自由に会話をしたり、ノートを見せ合ったりしてもよいこととした。情報交換のポイントを伝え、友達の考え方を見たり、解決のヒントを見付けたりできるように声を掛けた。

(イ) 対話

司会者を立てて話し合いを行う等工夫する。全ての考え方が出されていないような場合は、教師がグループにヒントを与え、検討させる。

(ウ) グループ検討

自分の意見を伝え合う時間を設定する。自力解決力を把握し話し合うペアの組み方に留意する。



イ ながら説明

自己の考えをグループ検討時や説明の際、言語表現に併せて「～しながら」説明をする。

(ア) 対話・グループ検討



ノートを指しながら



プリントを指しながら



具体物を動かしながら

(イ) 発表説明



表にかき込みながら



図を操作しながら



図を動かしながら

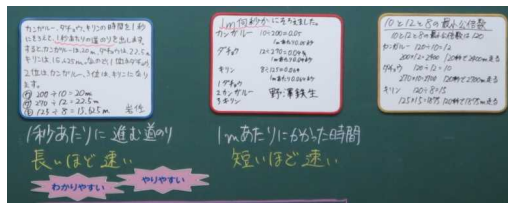
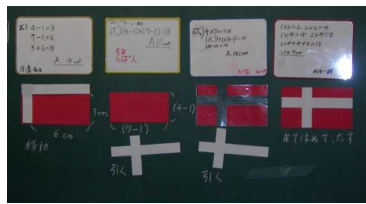


問題に返り、指しながら

④ 「説明ボードの活用の仕方を工夫することで、理解が深まった」

説明ボードの活用 (全体検討)

複数の考え方を取り上げ、多様な考え方に気付かせ、それぞれの共通点や相違点に気付かせる。異同弁別を視覚的に捉えやすいように移動可能なマグネットボードを活用する。事前に教師が児童から出されるであろう考えの掲示物を準備しておく。



「ボード・図・ネーミング」 「ボード・ネーミング・話し合いの結果」 「ボード・図・共通事項の記号化」

⑤ 「話し合いのパターンを作ることで、比較検討力が向上した」

ア 話し合いのパターン化

(ア) 発表の仕方を決める

各学級・学年で、発表の仕方(話型)を決め、発表時の約束ごととする。

(イ) 意見に名前をつける(ネーミング)

児童から出た意見に名前をつける。考え方を要約した名前や聞いてすぐに想起できる名前を付ける。学年で統一させることにより既習事項の振り返りにもなる。

(ウ) 共通点や違いを見つける

頭で考えるのではなく、複数ある考えを実際に試してみることで、解きやすさや友達の考えの理解を深めることにつながるため、時間を確保した。

イ 話し合いの方法

(ア) 共通項方式 各解決の中から、共通項を見いだす話し合いを深めていく方法

解決1	解決2	解決3
共通項	共通項	共通項



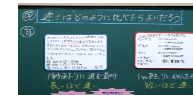
(イ) 全部承認方式 考え方、解決方法の良さについて話し合いを深めていく方法

解決1	解決2	解決3
○ ○	○ ○	○ ○



(ウ) 優劣判定方式 どの解決が一番よい方法か話し合いを深めていく方法

解決1	解決2	解決3
○	○	◎



(エ) 正答選択方式 2つ以上の考えを取り上げ、話し合いで正しい答えを導き出す方法

解決1	解決2
○	△



※ ◎とてもわかりやすい考え(正答) ○わかりやすい考え(正答) △誤答

プロジェクト3 学習習慣および生活習慣の確立

家庭と学校との連携を深め、子どもたちの学習習慣をつけていくことで、「読むこと」「書くこと」「計算すること」を基本とする確かな学力を養っていくことを目指し、家庭学習の取り組みを始めた。

教員、児童、保護者が共通理解の下に取り組むことで、その内容や取り組み方をステップアップさせていき、自ら学ぶ児童へと育てていくことができると考えた。そこで、1年目は家庭学習の基礎を築くこと、2年目は家庭学習の内容を宿題から自主学習へと向かわせる準備期として自主学習への意欲を高めていくこと、3年目は必要性のある自主学習ができるようになることを目指し、全校で同じ方向性を持って自主学習への取り組みを実践した。



(1) 「家庭学習の手引き」「八木が谷小の家庭学習のすすめ」の作成

集中して学習に取り組む環境づくりや家庭学習における目指すべき姿、学年に応じた学習のめやす時間について、児童、保護者と共通理解する手立てとしてリーフレットを作成した。児童の興味関心や実態に応じて幅広い学習が行えるよう自主学習の内容の事例も紹介し、保護者に対しては4月の懇談会を利用して直接説明をしながらリーフレットを配布し家庭での協力を仰いだ。

**八木が谷小学校 家てい学習の手引き (3年生)**

毎日、がんばろう!!  
宿題 + 自主学習 **20~30分**

始める前に...

始める前に...

終わったら...

**八木が谷小学校 家てい学習の手引き (6年生)**

毎日、がんばろう!!  
宿題 + 自主学習 **40~50分**

始める前に...

始める前に...

終わったら...

**八木が谷小の家庭学習のすすめ**

【家庭学習のポイント】

- 学習意欲の維持
- 元気に学び、途中で飽きない
- 学習する時間
- 学習が終わったら

【家庭学習のステップアップ】

- 学校の宿題が定着する
- 宿題以外でも自主学習ができる
- 宿題以外にも自主学習ができる

(3) 家庭学習の時間のめやす

1~3年 20~30分  
4~6年 40~50分

(4) 家庭学習の内容 (ご家庭でもあります)

学年	国語	算数	英語・理科・社会等
1年生	読書、漢字の練習	計算練習	英語の発音練習
2年生	読書、漢字の練習	計算練習	英語の発音練習
3年生	読書、漢字の練習	計算練習	英語の発音練習
4年生	読書、漢字の練習	計算練習	英語の発音練習
5年生	読書、漢字の練習	計算練習	英語の発音練習
6年生	読書、漢字の練習	計算練習	英語の発音練習

(2) がんばりカード

児童の努力を目に見える形として残すことで、変容が見え達成感を持って家庭学習に取り組ませると共に、バランスよく様々な学習に取り組ませることを意図した記録カードを作成した。教員が児童の学習実態を把握することで一人一人に対する指導へと生かすこともでき、月末に保護者にコメントを記入してもらうことで児童のモチベーションを高めると共に保護者が児童の家庭学習の状況について関心を持つ機会になるようにもした。

**家てい学習のがんばりカード**

4月

1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

2年生

**4月**

1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

3~5年生

**学習項目例**

- 漢字、熟語調べ、ことわざ調べ、意味調べ
- 日記、作文、詩、俳句、短歌
- 音読、読書 (記録する)
- 社会科の調べ学習、予習復習、ノートまとめ
- 理科の調べ学習、予習復習、ノートまとめ
- 計算、作図
- 算数の公式や考え方などのまとめ
- 英単語、ローマ字、アルファベット
- 気になるニュースの要約・解説・感想など
- 教科書視写

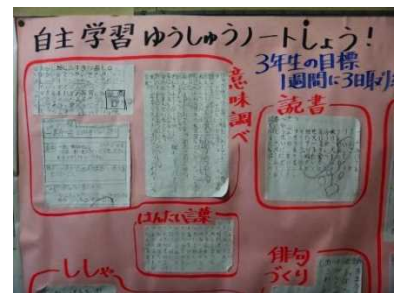
(3) 自主学習をがんばったで賞（皆勤賞）の発行

1か月間、毎日欠かさず自主学習に取り組めた児童に対して毎月末に賞状を発行した。児童の頑張りを目に見える形にして認めることで意欲向上を図れるよう、自主学習の内容や時間に制限は設けないことで取り組みやすさを重視した。



(4) 自主学習内容の紹介

自主学習を行ってきた児童のうち、よくまとまっていたり、内容が工夫されていたりするノートを帰りの会でみんなに紹介したり、コピーをして壁や学年掲示板に掲示したりした。学び合いの場である学校での授業同様、情報を共有することで互いに切磋琢磨し合い、みんなで自主学習の質を高め合っていけるよう力を入れて取り組んだ。



(5) ホームページ

本校での家庭学習の取組を紹介したり、支援したりする手立てとしてホームページに家庭学習のページを作成した。学校で配布した資料やがんばりカードのほか、千葉県教育委員会から出されている「家庭学習の事例集」「ちばっこチャレンジ100」「家庭学習のすすめ」や、「学力・学習状況」検証事業の他校の取組を掲載し、家庭学習の際に活用できるようにしたり保護者の意識を一層高める手立てとしたりした。

(6) アンケートの実施

保護者向けに家庭での児童の学習状況や変容についてのアンケート調査を実施した。質問を通して、どのような成長を目指して取り組んでいるのかを再確認してもらうと同時に、子どもの変化に目を向ける機会にしてほしいとの思いを込めた内容にした。

**プロジェクト4 個に応じた指導の充実**

学力向上を図るために、個に応じた指導が必要であると考え、少人数指導に取り組んできた。検証事業3年目に当たる今年度も、3年生と5年生の算数科で、少人数指導教員を配置し、指導した。

<取り組み方法>

3年生 「円と球」「三角形」などコンパスや分度器などの教具を使って指導する単元は、等質二分割による少人数指導を行い、「分数」「たし算とひき算の筆算」など計算を指導する単元は、チームティーチングによる指導を行った。

5年生 年間を通じて少人数指導を実施した。高学年では、学習内容が難しくなり既習事項の定着にも差が大きいため、習熟度別に学習集団を編成して指導した。習熟度別にすることは、テストを実施し、児童の希望も考慮した上でコース別に分けた。指導にあたっては、指導者の他に学習サポーターが支援に入り、主に遅進児童の個別指導を行った。

## 3 取組の成果と課題

## 各プロジェクトの成果

## (1) プロジェクト1：知識・技能の定着「スキルタイム」

3年間基礎基本の学力の習得を目的とし、算数科を中心に取り組むことを通して、解き方が定着し、速く正確に解けるようになった。スキルタイム用ノートや計算ドリルの使用により、時間になったら自主的に取り組むなど、学習意欲の高まりや学習習慣の定着も見られた。また、問題を印刷する手間が省けて内容も充実しており、確認もしやすかった。朝の日課について、「スキルタイム＋読書タイム」を弾力的に行ったことで、早く終わった児童は先に読書を始める等、個人差への対応ができた。読書タイムを通年で行ったことで、4分間走後落ち着いて学校生活を始められた。

## (2) プロジェクト2：知識・技能を活用する力の育成「校内研究」

## ア「自力解決に必要な知識（既習）と手立ての工夫により、自力解決力が向上した」

単元の系統性を把握し、前時のふり返り・掲示物の作成により既習事項の確認を行ったことで、問題を解く際の手がかりとなった。また、ヒントカードを数パターン用意して一人一人の児童の実態に応じて支援をすることで、自力で解けなかった児童が1通り考えられるよう、一通り考えられた児童は別の考えに気付けるようになるなど、全体的な自力解決力の向上を図ることにつながった。他にも、問題把握のために具体物を用意したり、それらの提示の仕方を工夫したりすることも有効な手立てとなった。

## イ「自分で解ける喜びを感じ、算数の学習の意欲が高まった」

全体で見通しを持つ時間を十分確保し、演算決定とその理由の確認をくり返し行ってきた。これにより、演算決定ができるようになった児童が増え「何算で解くの？」と質問する児童が減少した。また、「図・式・言葉」で考えるノート指導の継続によって、書き方のイメージをつかめるようになり、積極的に自分の考えを書こうとする姿が多く見られるようになった。低学年では、ブロック操作によって解決方法に気付けるようにしたことで苦手意識が軽減し、積極的に取り組めるようになった。こうした成果は、「式や答えを予想して解けた」という喜びが自信となり意欲の向上となった。

## ウ「友達との交流場を増やすことにより、発表説明力が向上した」

全体検討前に「対話・グループ検討」をすることにより、全員に説明する機会を増やすことができた。全体での発表が苦手でも、少人数であれば話しやすく感じる児童もいたようで徐々に発表への抵抗も減り、意欲的に発表する児童が多く見られるようになった。また、発表場面においては「ながら説明」を取り入れたことにより、相手を意識した伝え方ができるようになり発表説明力の向上となった。

## エ「説明ボードの活用の仕方の工夫、話し合いの仕方（発表からまとめまでの流れ）をパターン化することにより、理解が深まり比較検討力が向上した」

教師が発表説明からまとめまでの流れを意識することにより、比較検討における話し合いの観点を的確に伝えることができた。また、複数の考えを取り上げながらも、考えを整理してスムーズにまとめに進められるようになった。これにより、児童は話し合いの観点を意識しながら比較検討を進めることができた。他にも、「ながら説明」「説明ボード」の活用の仕方を工夫することにより、説明する児童は考えをわかりやすく伝えようと意識するようになったことで、聞き手は思考過程を知ることによって理解が深まった。それにより、友達の考えと自分の考えを比較できるようになったと考える。特に中高学年の児童の向上はめざましく、お互いに認め合うことで解決方法を伝え合う喜びにもつながったようである。

## オ「実際に友だちの考えで解いてみる方法をとることで、複数の解き方を比較して自分なりにそのよさを判断できる児童が増えた」

複数の意見を比較する際、自分とは違った解決方法を実際に行うことで、解きやすさや考えのよさに気付いたりする児童が増えた。これにより、全体検討での話し合いも今まで以上に核心にせまったものとなった。また、一度試すことでその方法での解き方ができるようになり、適用時に活用するようになるきっかけにもなった。



### (3) プロジェクト3：学習習慣および生活習慣の確立

#### ア 安定した学習習慣

家庭で机に向かう習慣が身に付き、宿題を確実にできる児童、自主学習に取り組める児童が増えた。各学級で自主学習の紹介や取り組み方の指導を継続的に行ってきたことや、保護者への啓発活動によって多くの家庭の協力が得られるようになったことの効果が表れ、児童の成長に影響を与え始めた。低学年からの継続的、計画的な取組によって、段階的に「宿題が出なくとも基本の学習ができる」「必要のある自主学習ができる」児童へと育てていくという本校が目指す家庭学習の形が根を張り、実をつけ始めたと言える。早い時期から「家庭学習をするのが当たり前」という環境で学習基盤を築けていることは、学習内容を発達と共により充実したものへと発展させていけるであろうことが期待できる。

#### イ 学習内容が宿題から自主学習へ

家庭学習として自主学習に取り組む児童が年々増加している。自主学習の取組回数に目標を設定して周知したり、学習の仕方の指導やノート紹介などの取組に力を入れたり、がんばったで賞の発行をしたりといった実践を続けてきたことの効果は大きいはずである。また、家庭への働きかけによって、保護者の児童への関わりが一層深まったことも影響しているであろう。学力向上に欠かせない家庭学習の内容を充実したものとしていける児童を育てていくためには、学校と家庭が協力して児童の学習環境を整え、その方向性を示し続けることが重要である。

また、自分で学習に取り組める児童を育てるためには、順序立てた指導が必要である。日々の生活の中で継続的にメニューの紹介などを行ってきた結果として、幅広く様々な学習に取り組める児童が増えたことから、さらに具体的な学習内容の紹介が必要であることがわかる。最終的には必要な学習の全てを自分の力で考え取り組めるようになることが目標ではあるが、まずは選択、そして自分なりの工夫という段階を経験させる中で自ら学ぶ力を育てていくことが必要である。

#### ウ 継続的、計画的な取り組みによる段階的な成長

「八木が谷小学校の家庭学習」の目指すべき姿を明確にしたことで、学年が上がったり担任が変わったりしても一貫性のある指導を続けることができるようになった。家庭学習への取り組みせ方、意欲を向上させる手立て、保護者への啓発活動などにおいて教員間で共通理解を図り、全校で同じ方向性を持って実践を続けていけるようになったことで、6年間という長い期間をかけて計画的に宿題から自主学習へと家庭学習のステップアップを促していけるようになったと言える。

#### エ 啓発活動による保護者の意識改革

“家庭”学習は本来、家庭の役割として取り組ませるべきものである。学習習慣が十分とは言えない児童が多かった本校において、3年間という時間を掛けて家庭学習に向かわせる環境を整え、保護者に協力を仰ぎ、児童のやる気を引き出す手立てを講じ続けてきた成果が見えるようになった今、家庭学習を家庭に返すスタート地点にあると言える。家庭学習を習慣化させ、児童、保護者にその必要性や有用性を認知してもらうことで、家庭での学習はより自発的なものとなってきている。学校と家庭という両輪がそれぞれの役割を果たし、児童の学力向上を支援していけるよう引き続き家庭学習の取り組みを続け、その内容を一層深めていきたい。

### (4) プロジェクト4：個に応じた指導の充実を図る

プロジェクト4の算数科における個に応じた指導は、「学習がよくわかる。」「算数が楽しい。」という情意面で、多くの児童に達成感を持たせることができ、少人数指導は有効であった。このことは、プロジェクト1のスキルタイムの、基礎・基本の定着という取り組みにつながっている。そのことが「できた。」「わかった。」という実感を生み、プロジェクト3の家庭学習への意欲となっていると考えられる。そして、各プロジェクトが相互に関連し合いながら、それぞれのプロジェクトを充実させ、児童の学力向上に寄与していると考えられる。

少人数指導を行っていくうえで、学校行事や急な時間割変更など、担任と少人数教員の授業の進度調整などの対応や、教材の選定やグループ分けの難しさなどの課題も残った。

平成27年度 「学力・学習状況」検証事業研究成果報告書

1 研究主題

「子どもたちの確かな学力の向上を目指して」  
～子どもの意欲を喚起する授業の工夫～

2 研究の概要

ア 児童・生徒の実態（「全国学力・学習状況調査」の結果から見られる課題等）  
◇国語、算数ともに記述式に大きな課題がある。

【国語】

- ・漢字の書き取りの正答率が低い。ドリルや朝の学習，家庭学習などで書き取りの練習はしているが，あまり定着していない。そのため，漢字学習に対する意欲を高める取組と，文章の中で活用できる場면을授業の中で多く設定する必要がある。
- ・故事成語の意味と使い方の正答率が低い。意図的に日常生活で故事成語を取り上げる場면을設定することを考えたい。
- ・二つの詩を読み比べて，自分の考えを書くことができていない。また，詩の内容や表現の工夫，作者のものの見方や考え方について理解を深めることができていない。まず，物語や詩を読んで，自分の考えをしっかりと持つことを指導していく必要がある。

【算数】

- ・A問題1の計算問題には概ね成果が表れていた。これは、補習等で計算問題を中心に復習をしてきた成果と思われる。しかし，小数の入った計算や減法と乗法が混在した整数での計算の正答率が低い。そのため，個々の苦手部分を明確にし，ポイントを絞って個別学習を行う必要がある。
- ・作図に用いられている図形の定義や性質を理解しているかの問題について正答率が低い。コンパスを用いた書き方の問題では，コンパスを活用する意味を理解させる必要がある。
- ・割合が1より小さい場合でも比較量の求め方が（基準値）×（割合）であることが定着していない。単純な求め方を教えるのではなく，その仕組みを学ばせる必要がある。
- ・小数に対して概念がしっかり理解できていないため，小数を活用して回答を求める問題でつまずきが多く見られる。そこで，小数の特性を再度指導する必要がある。

イ 学力向上のための取組と成果（「学力・学習状況」検証事業を通して）

【1年目の取組】

①教育課程の工夫

- ・基礎学力の向上を目的に，週1回1、2年生は30分，3年生以上は40分の補習の時間を設定し，プリント学習を基本に，T・T指導，少人数指導，習熟度指導を

行った。

## ②校内研究の充実

- ・教師の指導力向上を目的に、「子どもの意欲を喚起する授業の工夫」を研究主題とし、算数の授業研を計画的に行った。特に「効果的な発問のあり方」について、筑波大付属小の教員を講師として、指導案作成から指導を受けた。

## ③二川中との連携

- ・9年間を見越した指導の必要性を感じたため、近接する二川中学校と連携を図りながら、児童生徒の指導を行っていくようにした。特に6年生が中学校を会場に、中学校教員、小学校教員等が指導する「二川塾」と称した学習を行った。第1回は算数に限定し、単元別、習熟度別に行い、第2回では中学校の学習内容につながる講座を開設し実施した。
- ・小中合同研修会や合同懇親会を開催し、小中の教員がお互いを知り、学力向上に関する千葉県の施策を共通理解していくようにした。

## ④プロジェクトチームを組織

- ・学力向上に有効な取組を検証、検討、実施するため、5つのプロジェクトチーム（基礎学力向上プロジェクト、教師力向上プロジェクト、家庭学習推進プロジェクト、調査・研究プロジェクト、二川小・中連携プロジェクト）を組織した。

## 【2年目の取組】

1年目の取組を踏まえ、より有効な活動にするため、プロジェクトチームの活動を拡大し、それぞれのプロジェクトが提案した取組を実施した。

### ①朝学習・補習プロジェクト

- ・週1回の補習、月2回の土曜授業での学習の内容を、学習進度、定着度の状況等を考慮した学習素材の準備を行い、T・T指導、少人数指導、習熟度指導を実施した。子どもの算数に対する苦手意識は、かなり軽減された。

### ②研究授業プロジェクト

- ・日常の授業の質の向上が学力向上の根幹であることから、指導力の向上を目指し校内研修が充実するように検討した。授業を行う学年のみでは無く、他学年の教員や担外の教員も加わり、指導案作成から協議していった。その上で、授業展開し、授業後の研究協議では、各自が代案を考えながら活発な意見交換ができ、充実したものとなった。

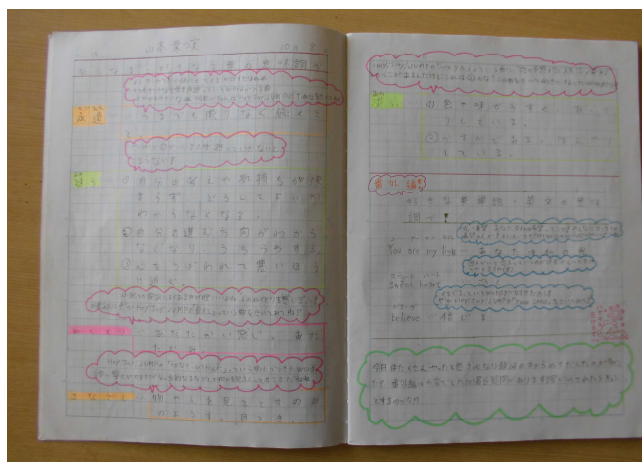


③調査・研究プロジェクト

- ・児童を対象に、学習意欲アンケートを実施した。結果を分析し、国語学習及び算数学習に対する意識と現状についてまとめた。

④家庭学習プロジェクト

- ・家庭学習の質を高めるため、リレーノートを使用した家庭学習を実施した。学級内で4, 5人のグループを編成し、グループごとに学習ノートをリレーしていく。ノートを回す際、グループの友達やその保護者が内容をお互いに見合うことにより、友達の良いところを取り入れたり、自己の取組を反省したりしながら質の高まりを見せた。



リレーノートの様子

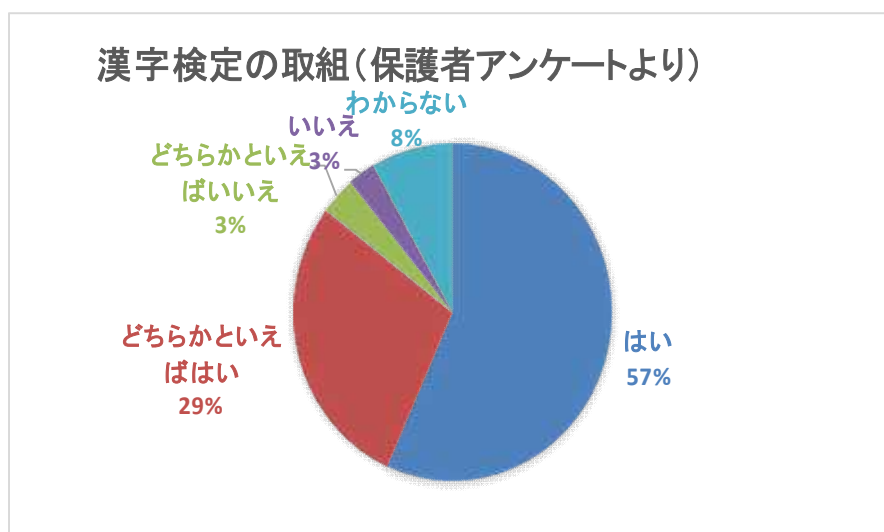
- ・また、「家庭学習リーフレット」を配付し、懇談会等で家庭学習の意識を高めるよう保護者に呼びかけた。

⑤二川塾プロジェクト

- ・前年度から行っている「二川塾」の回数を年3回に増やし、充実を図った。また、二川中で行っている中学生対象の補習（二川塾）に小学校の教員も指導に出向き、連携を深めた。特に児童の感想からも、6年生にとって中学校進学に関する不安等、いわゆる「中1ギャップ」の軽減を感じる表現が見られた。

- ・「全国学力・学習状況調査」の分析から明らかになった、国語学習の課題を克服する第一歩として、国語学習への興味関心を高めることを目的に漢字検定の活用を行った。漢字検定受検を目標に、朝の学習や、野田市が今年度から実施した土曜授業及び補習で漢字の学習に取り組み、1月31日の検定に全校児童の84%が受検した。

学校評価アンケートでも、85.7%の保護者から「漢字検定の活用の取り組みは良かった」との高評価をいただいた。

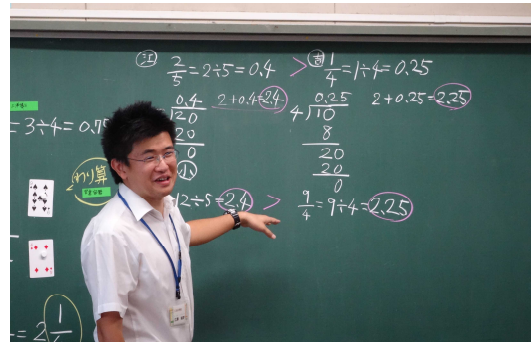


## 【3年目の取組】

1, 2年目の取組を踏まえ、プロジェクトチームの再編を行い、より本校の実態に即した取組を行えるようにした。

## ①校内研プロジェクト

- ・年3回行われる校内研修の計画立案、運営を進めるプロジェクトである。今年度は、特に「効果的な発問の仕方」、「意欲を高めるための問題の提示」に焦点を当てて、研究を進めてきた。今年度も筑波大付属小の教諭を講師として招聘している。



## ②学力向上プロジェクト

- ・児童の学力向上を目指し、多角的なアプローチを行った。このプロジェクトは、補習・朝学習班、漢検班、二川塾班の3班で構成されている。
- ・補習朝学習班では、朝学習と週1回の補習、土曜日授業の補習の内容を関連づけて計画し、進めることによって、基礎基本の定着を図っている。
- ・漢検班では、本校を会場としての漢字検定を年2回に増やした。今年度最初の検定は、6月13日に行われた。昨年度末に合格できなかった児童が主な対象であった。合格率は73.7%となった。2回目は1月30日に行った。申し込み状況は全校の94%と、昨年度より10%上昇した。
- ・二川塾班では、「質を高める」という観点から、6年生が全員参加であった夏の二川塾を上位児童のみの参加とし、内容を精選して数学の世界に迫る学習を行った。また、基礎基本の習熟を図る必要が有る5・6年児童を対象として「ステップアップ塾」を今年度から計画・推進した。



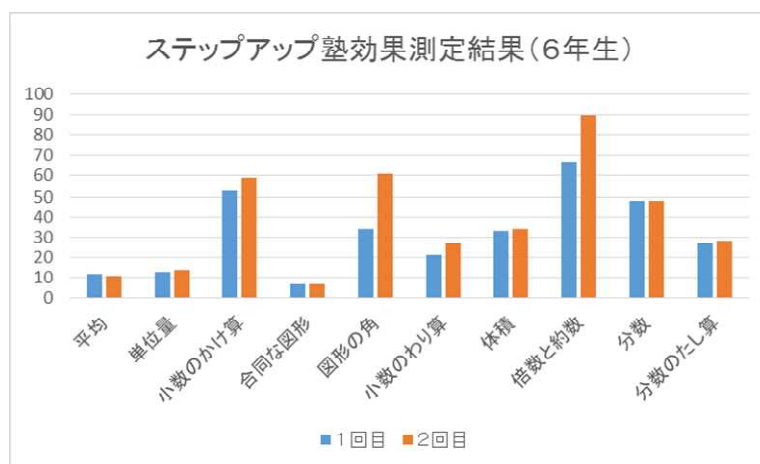
二川塾の様子

## ③家庭学習プロジェクト

昨年度好評だったリレーノートは今年度も実施した。また、今年度は保護者の関心を高め、家庭教育力を向上させることを目的に、「家庭学習講演会」を計画・実施した。家庭で学習する際の子どもへの接し方や声のかけ方の工夫について、講師の方にお話しいただいた。参加した保護者からは非常に好評であった。

## ④調査プロジェクト

全国学力・学習状況調査や児童の意識調査の結果だけでなく、ステップアップ塾の効果テストの調査も行うようにした。これにより、児童個々のステップアップ塾での効果や問題点を探っていくことができた。



## ウ 検証改善サイクル

(P D C Aサイクル)

本校のP D C Aサイクルは、①教育課程、②校内研究、③プロジェクト会議の3点において、活用されている。

## ①教育課程

教育課程においては、主に土曜授業を活用することや、放課後学習のステップアップ塾などにおいてP D C Aサイクルを活用した。土曜日授業の内容、朝学習、補習を関連付けることを計画し、児童・保護者へのアンケートでチェックをした。それを受けて、プリント学習のみに偏らないよう、またきめ細やかな指導が行き渡るように教科を設定し、T 3、T 4が各クラスに入れるように設定するなど見直しを行った。

## ②校内研究

本校の研究主題である、「子どもの意欲を喚起する授業の工夫」を達成するために、研究推進委員会を活用し、年内の研究授業から反省点・改善点を探り、次年度に何を重視すれば子どもたちが意欲的に学ぶのかを検討・実行した。

## ③プロジェクト会議

定期的に各プロジェクト会議を開催し、取組について常に見直し・修正を行っている。特に年度末の会議では、次年度のプロジェクトの在り方自体を話し合い、新規立ち上げや統合、分離など編成について案を出し合う場としている。

## 3 取組の成果と課題

(成果)

- ・算数の授業について、学力向上担当教員、少人数指導教員、市雇用講師を活用し、全学級で少人数指導やT T指導を実施している。
- ・各学年が行う週1回の補習及び、土曜授業での補習に学力向上担当教員、少人数指導担当教員、市雇用講師が全員入り、習熟度学習や個別指導にあたっている。子どもたちからは「苦手な算数がわかってきた。」との声が聞かれている。
- ・ステップアップ塾では多くの教員が必要になってくるが、ここに加配教員を配置することにより、きめ細やかな指導を実施することができた。
- ・土曜授業では、3時間のうち1時間を算数の補習とし、学力向上担当教員、少人数

## 野田市立二川小学校

担当教員，市雇用講師に加え，市内にある東京理科大の学生を含めた土曜授業アシスタント及び近隣の関宿高校の生徒に学習指導補助員として参加していただき，習熟度別学習や個別学習をさらに工夫して進められるようになった。

- ・家庭学習について，リレーノートにより質の向上は高められた。まとめ方がよくわからなかった児童も，友人のノートを真似することでノート作りに対する意欲が高まった。また，保護者も他の子どものノートを見ることで，家庭学習に対する意識も高まった。

### (課題)

- ・全体的に家庭学習に対する意識は高まってはきたが，今後はそれを量的に拡大する方法を考える必要がある。そのためにも家庭を含めた意識改革をさらに促す取組を考えたい。
- ・「全国学力・学習状況調査」におけるB問題に対する対応を考えていく必要がある。特に考える力を伸ばす取組や生活に活用する力をさらに高めていく方策を考えていく必要がある。
- ・算数に重きを置いて研究を進めてきたので，文章の読み取りや書くことについて課題が残る。今後は国語学習にも力を入れていかなければならない。
- ・9年間を見据えた指導を意識し，中学校との連携をさらに強める。特に，6年生以外の学年も含め，双方の教員が授業に関わること，例としては中学校の英語の教員が小学校の授業に入ることや，総合的な学習で小学校から引き続き中学校まで活動が継続できるような内容を年間計画に位置付けること等が挙げられる。

平成27年度「学力・学習状況」検証事業研究成果報告書

1 研究主題

「わかる算数」「楽しい算数」をめざして  
—生き生きと学び合う子どもの育成—

2 研究の概要

ア 全国学力・学習状況調査の結果における特徴と分析

国語では、「活用」及び「選択式」の問題において正答率が高い傾向がある。その他各領域は、それぞれに課題があるが、特に「記述式」の問題形式において大きな課題が残る。

算数に関しては、「数と計算」、「選択式」において正答率が高い傾向がある。中でも「数と計算」は全国平均を上回っている。逆に、「数量関係」「記述式」に対しては、課題が残った。

児童質問紙の結果を見ると、調査項目の全教科に関する関心等が低い。また、学習習慣、言語活動・読解力、自尊感情のポイントが低いということがわかった。その中でも、特に学習習慣のポイントが低い。

イ 学力向上に成果のあった取組

朝読書の設定

国語の「話すこと・聞くこと」が低いポイントだったことを受けて、昨年度は週に1回だったものを今年度より朝読書の時間を週に2回確実に確保することとした。毎週火曜日と金曜日の朝の15分間に、教師の指導のもとに行う読書の時間を設定した。

算数教室の実施

本校の児童は、知識・活用ともに低く、学力の基礎の定着に問題があることがわかった。また、質問紙の回答より、学習習慣のポイントが低く、家庭学習の習慣の定着が弱いことがわかった。これを受けて、放課後、長期休業中である夏期休業中に教員側の視点で抽出した児童を対象に、算数の基礎学力の向上を目指した補習を実施した。放課後に実施する際は、週に1回、確実に実施し、担任及び担外の職員（音楽専科、学習サポーター、少人数指導の職員、言葉の教室の職員、特別支援教育推進指導教員等の職員）と全職員で指導に当たった。

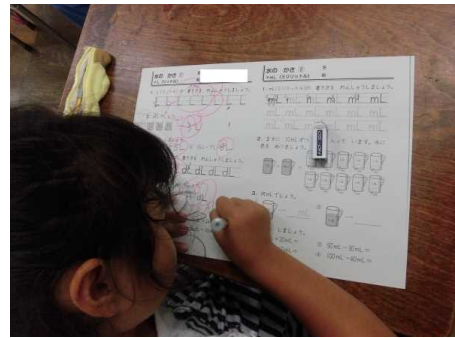
内容は、その時に学習しているものの復習や、もっと前に戻っての算数の基礎の定着に力を入れた。実施するにあたり、プリントを印刷し、





何枚も満点を取れたという達成感を味わわせながら、進めていくことを心がけて行った。

右の写真は、算数教室で2年生の児童を指導している際の風景である。児童の前面の机に数種類のプリントを印刷しておき、自分の取り組みたいプリントに挑戦できるように環境を整えた。指導中は、児童が進んでやりたいと思えるような、前向きな声かけを心がけ、取り組んだ問題にはすぐに丸付けを行いながら児童の意欲が継続するように配慮した。



普段の授業の中では、集中の継続が難しかったり、問題の解決に時間が掛かったりする児童でも、教師の目が行き届くため、意欲を持って次々に問題に取り組む姿が見られた。



### 算数モジュールの実施

算数教室と同じく、児童の学習習慣の定着をはかり基礎学力の向上を目指した取り組みとして、算数のモジュール学習を実施した。これは昨年度より始めた取り組みで、対象は、全学級の全児童。児童の登校する月曜日から金曜日、毎日実施した。1回の実施時間は10分間。自席について、算数の課題に取り組んだ。昨年度は、清掃終了の13:45から15分間で行っていたが、今年度は児童が最初から落ち着いて学習に取り組めるよう、清掃を13:40までとし、13:45～55までの10分間実施することとした。これにより、児童が算数の問題に取り組むための時間を、毎日確保した。



右の写真は、1学年と6学年の児童の算数モジュールでの活動の様子である。プリントを用いて学習を進めている。



その下の写真は、2学年と5学年の様子である。こちらは計算ドリルを進め、担任に確認印をもらっている。各担任の判断で、その時に必要な算数の内容を設定して取り組んでいる。



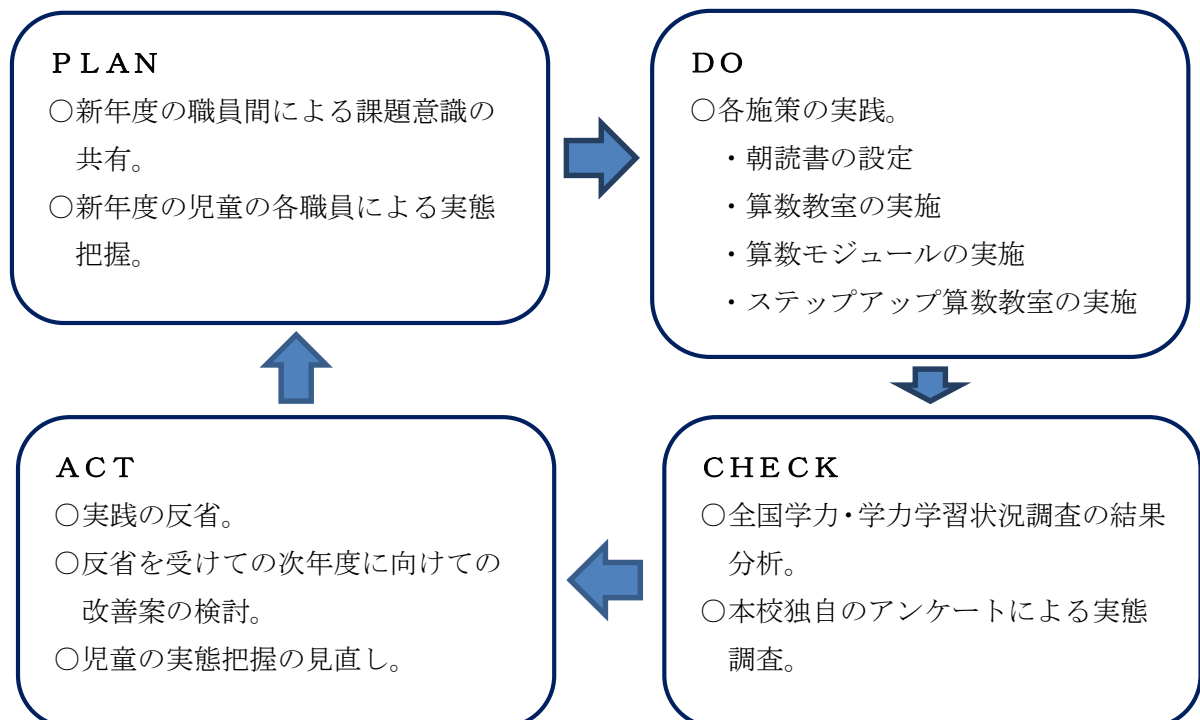
### ステップアップ算数教室の実施

初富小学校支援本部事業として、児童の基礎学力の定着を目指してステップアップ算数教室を実施した。全家庭に手紙を配布し希望を取り、希望者を募った。週に1回放課後に実施。教員が、各学年の学習内容であるプリントを印刷しておき、児童がそれを自分で選び学習を進める。児童の取り組みたい領域や問題を選んで取り組んだ。

右の写真がその様子である。音楽室・家庭科室・図書室を開放して実施した。今の学年よりも前の学年の内容を用意しておき、どんどんステップアップして行く。児童にとって、わかる問題・できる問題に次々に取り組むことができるため、一人ひとりに教師の目が向くわけではないが、どの児童も熱心に学習している。



### ウ 検証改善サイクル（PDCAサイクル）



### 3 取組の成果と課題

今年度と昨年度に実施した、全国学力・学習状況調査の本校の平均正答率を比較すると、国語は苦手だった記述式の出題に対してのポイントが大きく向上した。

算数においては、数量関係についての問題に対しては、昨年度より落ち込んだが、その他の項目においては、どの項目も向上する結果となった。特に向上の幅が大きかったのは、「数と計算」の領域に関するものと、「記述式」の問題形式のものである。「数と計算」においては、5.6ポイント、「記述式」については、7.8ポイント上昇した。

#### 成果

一つ目に、全国学力・学習状況調査の平均点が向上したということと、それに伴い全国平均へ近づいたということ。二つ目に、算数もモジュール学習や算数教室、また本校では昨年度から校内研究の教科を算数として取り組んできたことでの教師側の算数の授業力向上を通して、学校全体で算数に取り組むという風土を形成できたということ。三つ目に、職員・児童共に無理のない活動を通して、学力向上へ向けて取り組めたという事が挙げられる。

また、加配教員を活用したことによって、より個に応じた指導を行うことができた。授業を学級数+1ないし2（5年生）の教室で実施し、習熟度別の授業展開をしたことによって、児童一人ひとりが課題意識を持って授業に臨めるような環境を作ることができた。

#### 課題

1. 下位層に位置する児童が固定化していて、その児童らの学力向上が難しい。
2. 基礎基本の定着を目指した取組に重きを置いていたため、発展的課題・応用問題に対して児童の適応が不足している。

平成27年度「学力・学習状況」検証事業研究成果報告書

1 研究主題 「主体的に学習する児童の育成」 ～学び合いを通して～

2 研究の概要

(1)「全国学力・学習状況調査」の結果における特徴と分析

<国語>

「平均正答率の経年変化」から、国語Aについては昨年度と同様平成25年度と比較すると伸びてきている。国語Bは昨年よりは伸びてきていて平成25年度とほぼ同様であった。

領域では、「話すこと・聞くこと」「読むこと」が大きく伸びているが、「書くこと」の領域が下がってしまった。これは、「書くこと」の活動が学習活動の中で不足していたためであると考えられる。

問題形式では、「短答式」「選択式」は伸びているが「記述式」は下がってしまった。「話すこと・聞くこと」については、国語A3「聞き方の説明として適切なものを選択する」設問から、「話の内容に対する聞き方を工夫する」ことができる児童が多かったことが分かる。しかし、「書くこと」については、B13「複数の条件に応じながら、内容を整理して書くこと」の設問からは、「目的や意図に応じ、取材した内容を整理しながら記事を書く」ことができなかつた児童が多いことが分かる。これは、学習活動が「話すこと・聞くこと」を中心に組み立てられることが多く、書くことの中でも条件付けのある書く活動の設定が不足していたためであると考えられる。

<算数>

「平均正答率の経年変化」から、算数Aについては一昨年とほぼ同様であったが、算数Bについては、昨年、一昨年よりも下がってしまい大きな課題である。児童の意識調査も算数への関心・意欲が下がってしまった。

領域では、「量と測定」は昨年度とほぼ同様であったが、「数と計算」の領域が昨年、一昨年よりも数値の低下が見られる。このことは、学年による個体差が大きいことが原因である。この学年は、千葉県標準学力検査では4・5・6年と伸びてきている。今後、校内研修で課題解決に取り組んでいく。

問題形式では、「選択式」は伸びているが「記述式」「短答式」は下がってしまった。「数と計算」については、算数A2(3)「異分母分数の減法の計算をする」(4)「除数が整数である場合の除法の計算をする」設問での誤答が目立ち、異分母分数の加法減法や分数の除法の理解と計算の仕方が十分に身に付いていないことが分かる。

<学校質問紙>

「学校質問紙の経年変化」では、「学力向上に向けた取組」「指導方法・学習規律」のポイントが下がってしまった。

「教員研修」「教職員の取組」については伸びてきている。また、「地域人材・施設の活用」も伸びが認められるが「児童の状況」は下がってしまっていた。後段に述べる児童質問紙では家庭学習への取組は伸びているのに、学校質問紙では伸びが認められない。児童の意識と教師の評価にずれがある。これは、家庭学習をやる子

とやらない子が固定化してしまっているためであると考えられる。

<児童質問紙>

「児童質問紙の経年変化」では「国語への関心」に比べ、「算数への関心」が低い。「自尊感情」と「規範意識」、「家庭学習の習慣」が伸びてきている。「自尊感情」については、児童質問紙（6）「自分には、よいところがあると思いますか。」の設問に対する、本校児童の肯定的な回答は、昨年、一昨年度に比べ、本年度はかなり高まってきた。また、「規範意識」についても高まってきている。児童を認めて、ほめて、励ます指導の成果だと考えられる。「家庭学習の習慣」については、児童質問紙（20）「家で、自分で計画を立てて勉強していますか。」の設問に対する、本校児童の肯定的な回答が、本年度は、一昨年度に比べると、大きく伸びてきている。

(2) 学力向上に成果のあった取組

①今年度の課題から行った授業改善 事例 <国政研の授業アイデア例より>

—— 課題の見られた問題の概要と結果 ——  
 国語B 1三 正答率34.9%（全国）、24.2%（本校）  
 「複数の条件に応じながら、内容を整理して書く」設問  
 【中田とよさんへのインタビューの様子】の内容をまとめて書く。

学習活動1 新聞で一番伝えたいことは何かを話し合い、学習課題を設定する

昨年の交流会は、楽しかったな。楽しい交流会の様子を伝えたいな。

今年も大勢の方と交流するそうよ。下級生に紹介したいわ。

みんなの意見をまとめると、今年号の学校新聞で一番伝えたいことは交流する楽しさだね。

学習課題 交流する楽しさがみんなに伝わる新聞を作ろう

学習活動2 学習課題に基づき、紙面の割り付けを行うとともに、記事を書く

トップ記事の見出し：交流で広がる 心の輪

詳しく書き加えた内  
たことを振り返ろう。

トップ記事だから詳しく書く必要があるな。書く分量を増やそう。

もう一度、参加者にインタビューしたり、疑問に思ったことを図書館で調べたりするなど、再取材してみてもいいな。

詳しく書くポイント	①インタビューの話の内容などを見直す インタビューした際、記録したメモを基にして、話し手の言葉や様子を書き加えることで、話し手の気持ちや思いをよりの確に伝えることがで	②写真資料等で活動の様子などを確かめる 活動の様子などを書き加えることで、読み手により分かりやすく伝えることができます。	③参加者の意見や感想を聞く 参加者の意見や感想を書き加えると、読み手に説得力をもって伝えることができます。
-----------	--	---	--

ン ト	きます。		
書 く 材 料	「すぐにコツをつかんでく れてよかったわ。」  明るい声で話していた様子 が印象的	うまくできて、ハイタ ッチしている人がいた。	「おじいちゃんとす ぐに仲良くなれて、う れしかったな。来年も 来てほしいな。」

学習活動 3 完成した記事を読み合っ、交流する楽しさが伝わるかどうかを相互評価する

②「学び合い」の学習形態

児童の主体性・創造性を育むことを目的に、「学び合い」の学習形態を取り入れた。コの字型や4人グループでの学習、ペア学習などの学習形態にすることで、教師主導の授業から、児童主体の学習になってきている。児童は「学び合い」が大好きである。

③「家庭学習の手引き」の作成

家庭学習の定着を図るために、学校として「家庭学習の手引き」を作成し、毎年見直しを行い、2年目・3年目も全家庭に配付した。保護者の協力も、以前よりは得られるようになってきて、家庭学習に取り組む児童が増えてきている。その結果、児童の意識調査「自分で計画を立てて勉強する」が伸びてきた。

④「授業アンケート」の実施

児童、教師に毎学期「授業アンケート」を実施し、児童主体の授業になるように授業改善に取り組んできた。毎学期、各学年で「授業改善・学力向上プラン」を作成して、学年で歩調を合わせて学力向上に取り組んできた。児童、教師への「授業アンケート」は、学習指導の改善に役立った。

⑤「ドリルタイム」の活用

児童が主体的に学習に取り組めるように、「ドリルタイム」を活用してきた。担任以外の教師も、「ドリルタイム」の指導に加わり、個別指導をしてきた。また、宿題と共に自学ノートを作成してきたことで、家庭学習や自学に主体的に取り組む児童が増えてきた。

⑥加配教員の活用

加配教員の活用については、本校児童の学力の実態と、学力向上に向けた方向性を提示し、研究部や学年主任と調整を行った。学力向上に向けた取組について全職員に周知し、共通理解を図り、共通実践を行ってきた。

⑦校内研修体制の整備

本校児童の学力向上に向けた取組を行う校内体制を整えた。全職員が国語部会・算数部会のどちらかに所属して授業研究会を実践していくと共に、日常の実践組織として、学力向上部・学習調査部・学習環境部の3つの部会に分かれて活動してきた。毎月1回「各部会議」を行い、連絡調整をしてきた。

⑧小中の連携を図った研修体制の整備

八街中学校区3校合同「学び研修会」を年3回実施してきた。八街中学校・八街東小学校（本校）・八街北小学校の3校合同で、「焦点授業」を実施し互いに相互参観し合い、研究協議会を行い、学力向上をめざした「学び合い」について講師から指導を受けてきた。

⑨授業改善

算数においては少人数指導を実施してきたが、何よりもすべての教科で、児童主体の「学び合い」の授業を実践してきた。ペア学習・4人組でのグループ学習・コの字型・市松模様の座席配置等の学習形態はもちろんであるが、それ以上に、学級を学び合う関係に作り上げていくことをめざしてきた。一人一人の児童がきちんと学べるように、分かりやすく、しかも質を下げない「学習問題」の設定を心がけて取り組むようにしてきた。「学び合う教室」「学び合う関係」作りをめざして、すべての子どもが深く学べる授業展開を心がけて実践してきた。



(3) 検証改善サイクル (PDCAサイクル)

< P l a n >

1. 授業に「学び合い」を取り入れ、児童の学習意欲の高揚と主体的な学習をめざす。3校合同の「学び研修会」(年間3回)
2. 学習習慣(家庭学習)の習慣化を図るため、「家庭学習の手引き」を作成し、全家庭に配付し保護者に協力依頼。
3. 地域の方々(八街みらい塾)の協力を得て、長期休業中に「東っ子塾」を開き、個別に学習支援をしていく。
4. 学力向上のために授業時数確保を確保する。そのために2期制実施。

< D o >

1. 「学び研修会」で焦点授業、授業研究会を行う。  
 <講師：東京大学・杉山先生>
2. 「家庭学習の手引き」を見直し、平成26・27年度も全家庭に配付し保護者に協力依頼。各学級では、自学ノートを作成し進め方を児童に指導する。
3. 地域の方々(八街みらい塾)の協力で「東っ子塾」を3日間開催。5・6年生の希望者200名以上が参加した。
4. 27年度より2期制実施。

< A c t i o n >

1. 1学期の「学び研修会」での、講師の指導を生かし、2・3学期にも「学び研修会」を実施していく。また、転入職員のために夏休み中に「学び合い」の研修会」を実施する。

< C h e c k >

1. 児童、職員ともに「授業アンケート」をとり、「学び合い」について児童は好意的。転入職員が多く定着が不十分である。
2. 学習習慣(家庭学習)の習慣化は、

2. 学習習慣（家庭学習）の習慣化ができていない児童への指導と個別面談時に保護者への協力依頼をする。
3. 長期休業中の「東っ子塾」への協力者（地域の方々）が増えてきているので、学習支援へのお礼を伝える。
4. 2期制の効果を高められるように教育課程を改善していく。

- 全国学力・学習状況調査」結果からかなり改善してきている。
3. 長期休業中の「東っ子塾」実施後に「夏休み評価テスト」を行い、効果についてチェックした。
4. 2期制の効果について、職員・児童・保護者にアンケートを行い、評価していく。

### 3 取組の成果と課題

#### (1) 成果

- ・「学び合い」を取り入れた授業によって、主体的に授業に取り組む児童が増えた。
- ・国語の「話すこと・聞くこと」の領域が伸びてきた。「学び合い」の授業でめざしてきたコミュニケーション能力の向上が少し見えてきた。
- ・「家で、自分で計画を立てて勉強する」児童が増えてきている。
- ・自尊感情が低いことが、本校の大きな課題であったが、児童質問紙の「自分には、よいところがあると思いますか。」の設問に対する肯定的な回答が平成26年度は57.0%であったが、平成27年度は75.9%まで高まってきた。

#### (2) 課題

- ・国語の「書くこと」の領域が下がってしまったこと、国語・算数ともに記述式の課題への解答が苦手な児童が多いことが、本校の大きな課題として残った。次年度以降も本事業で有効であった取組を続け、引き続き学力向上に努力していきたい。
- ・本校の特徴として、学習指導はもちろん生活指導においても、個別支援・指導を必要とする児童が大変多いことがあげられる。これらの児童も含め、個に応じた指導の視点を持ち、問題解決につとめていきたい。



## 平成27年度「学力・学習状況」検証事業研究成果報告書

### 1 研究主題

基礎基本を活用し、表現する力の育成を図る指導はどのようにすればよいか。  
～基礎基本の習得を図る授業の実践を通して～

### 2 算数科研究の視点

算数科研究の視点としては、次の4点を設定した。

#### (1) 学習の3つの場の視点

- ①教える場での中まとめの内容
- ②考えさせる場での説明し合う活動
- ③考えを深める場での多様な考え方の扱い方

#### (2) 導入の工夫の視点

- ①教科書素材の提示の仕方
- ②既習から本時へと無理なくつなぐ説明、話し合い、問題提示

#### (3) 発問の工夫の視点

- ①発問の4類型を活用した意図的な発問づくり

#### (4) 説明の場面での視点

- ①算数の用語を使った説明の書かせ方
- ②話型を活用した話し方

### 3 研究の概要

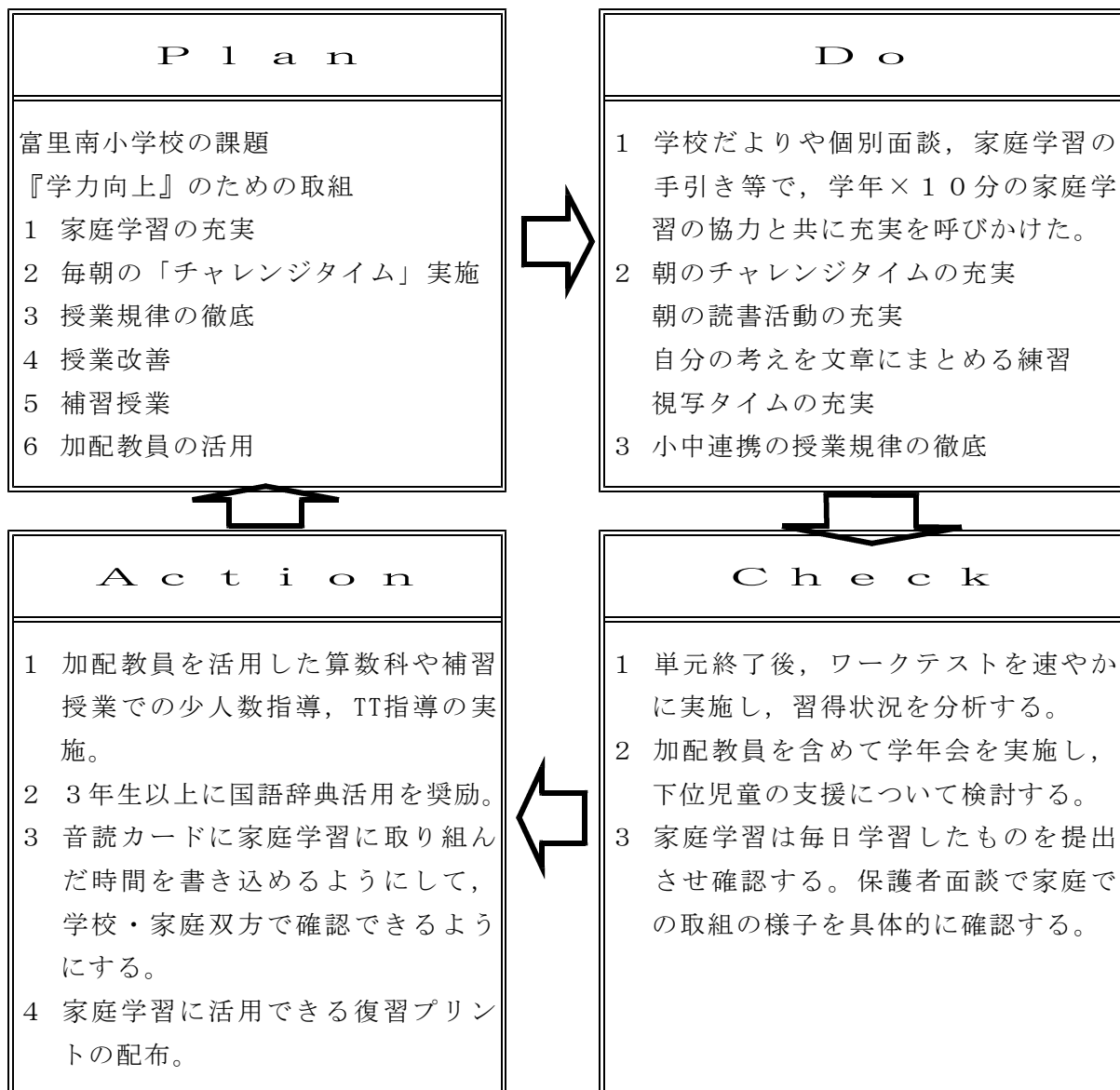
#### (1) 全国学力・学習状況調査結果における特徴と分析

- ①国語、算数、理科ともに「主として知識」の問題は、全国、県の平均正答率をやや下回る程度だが、「主として活用」の問題の正答率には大きな課題がある。
- ②国語では、漢字を読むことの正答率は全国、県の平均以上にできているが、漢字を書くことは、やや下回る程度である。
- ③国語の「主として活用」にある記述式の問題の正答率が全国、県の平均正答率を下回った。問題文の中の指定された部分を条件をつけて要約したり、絵図を見て考えられることを自分の言葉でまとめたりする問題に課題がある。
- ④算数では、分度器の活用方法の理解が全国、県の平均正答率より高く、よく身に付いている。
- ⑤算数の「主として活用」の問題では、約半数の問題で全国、県の平均正答率より低い。特に、比較量と割合から基準量を求める問題の正答率が低く、正三角形の特徴を利用した問題でも、課題が見られた。
- ⑥理科の顕微鏡の操作方法を問う問題では、平均正答率が全国、県よりやや高い。
- ⑦理科の振り子の性質を利用した問題では、正答率に課題が見られる。

#### (2) 結果分析を受けての対策と実践内容

- ① 今回の調査で課題のあった問題を中心に、全職員で自ら問題を解いてみる研修を行い、児童がつまづく要因について分析した。国語では問いに対して100字程度で記述して解答することが本校児童には難しいと感じた。そこで、他の教科の指導の場面でも、短い文章に考えをまとめて書く活動を入れていくようにした。算数では割合・図形の問題を解く力に個人差が目立った。それらの課題を考慮し、児童一人一人の習得状況を明確にした上で、チャレンジタイムで加配教員を活用した個別指導を実施した。
- ② 家庭学習の内容の充実を図るために、下位の児童や希望者に復習用のプリントを用意した。また、自学の模範ノートを見せるなどの指導を通して「やればよい」「ノートを提出すればよい」という意識を変えていくようにした。学校だより特別号や個別面談で家庭学習での保護者の協力を度々依頼し、学校だけでは習得しきれない分を補強できるようにした。

### (3) 富里南小学校の検証改善サイクル（P D C Aサイクル）



## 4 成果と課題

## (1) 成果

①家庭学習を習慣化することについては、多くの児童が目安の時間を達成できるようになった。その内容の充実についても、よくできている児童の学習例を紹介することにより、同様に取り組める児童が増えている。



②毎朝のチャレンジタイムでは、読書、ドリル、視写を実施した。静かな環境で集中力を高めることができた。視写では、「言葉のまとまりを覚えて写す」ことで、文章の意味をすばやく読み取れるようになってきている。



③算数の時間に、低学年は学習サポーターを、3年生以上は加配教員を配置し、少人数指導やT T指導を実施した。学習サポーターは低学年の集中力に欠ける児童に対応し、授業をスムーズに進めるために役立った。加配教員の個別指導では、ノートづくりに短時間で対応できるようになり、全ての児童がふりかえりに活用できたので、既習事項をもとに考えを深めることに役立った。また、児童一人一人の習得状況に合わせたきめ細かな指導もできた。

④小中連携の授業規律の徹底により、落ち着いて授業に取り組む姿勢を定着させることができた。学習のルールを常に確認することで学習規律が身に付き、話を聞く態度が明らかによくなった。高学年児童に対して4か月毎に実施している「生活アンケート」での「授業に主体的に取り組んでいる」という質問に対して「当てはまる」と回答する児童の割合が回を追うごとに高くなっている。

⑤読書活動を奨励するために、読書100冊達成者の全校表彰やブックトリップ（富里市立図書館が行う本のスタンプラリー）達成者の表彰を行った。読書100冊達成者は11名、ブックトリップ達成者は94名にのぼった。読書を通して想像力を高めたり、語彙を豊かにしたりすることができたことで、授業中の言語活動が活発になってきている。

⑥前期の学習評価では、特に高学年で昨年度よりもワークテストの得点が伸びている児童が多かった。また、7月と12月に実施している生活アンケートで「学校が楽しい」「授業がよくわかる」と答える児童の割合が毎回高くなっている。



## (2) 課題

①全国学力・学習状況調査に出題されるような長文の問題や複合問題などを経験させる時間を確保する必要がある。そのためには、チャレンジタイムを工夫したり、家庭学習や夏休みの宿題として同様の問題を用意したりするなど機会を考えなくてはならなかった。

- ②家庭の協力を得ることが難しく、学習に取り組む環境が厳しい児童に対して、その学習意欲を向上させ、学力の底上げを図る手立てが乏しかった。

平成27年度「学力・学習状況」検証事業研究成果報告書

1 研究主題

「学力向上のための学習指導のあり方」～思考力・表現力の育成をとおして～

(1) 研究の目標

児童の思考力・判断力・表現力を育成するための学習指導のあり方や学習習慣づくりを究明し、意図的・継続的な実践により、児童の学力向上を図る。

(2) 研究仮説

仮説1

自分の考えをもち、伝え合う活動を充実させれば、児童の思考力や表現力が高まり、学力が向上するだろう。

仮説2

児童が学習に集中し、学力を向上させるためには、基本的な学習・生活習慣を定着させることが有効だろう。

2 研究の概要

(1) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴と分析

本校の特色は、3年間の調査から「記述式」「活用」問題についてスコアが高い傾向にある。

国語において平成25年度は、「知識」や「伝統的な言語文化と国語の特質」のスコアが低く、もっとも苦手としたのは「漢字の読み書き」であった。「漢字」については年々改善傾向が見られ、平成27年度は「漢字」よりも「文の構成（主語の見極め）」に課題が残った。

算数においては、記述式問題が継続的に向上しているが「知識」「数と計算」がやや弱い。特に「小数点のある計算」は、小数点をそろえることが定着していない。

(2) 成果のあった取組

ア 『『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム』の活用

(ア) 「深める」場面での「伝え合い活動」

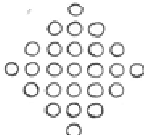
本校では、「見出す」「調べる」「深める」「まとめあげる」の4つの学習プロセス中、特に「深める」において「伝え合い活動」を実施し、思考力・表現力を育成してきた。そして思考力・表現力が高まった姿を「既習事項を想起しながら見通しをもって問題解決に取り組み、解決過程や考え方を筋道立てて表せる」とした。

平成26年度からは「伝え合い活動」をする際に、自分の考えを持たせるための手立てを検討している。

(イ) 授業改善の事例（国語）

学習活動と内容	時配 (形態)	○指導◎評価☆仮説との関わり	資料
1 本時のめあてを確認する。	10 (一斉)	○第1時に立てた見通しをもとに本時のめあてをつかませる。	活動計画の掲示物
屋根の上ののらねこは、リョウとかいねこをどのような気持ちで見ているのだろう。			
本時の場面の音読を聞く。	5 (個別)		挿し絵
2 屋根の上からリョウと飼いねこを見ている時ののらねこの気持ちを考える。	10 (グループ)		選択肢カード
3 考えたことをもとに、話し合う。	15 (一斉)	◎読み取ったことを進んで書くことができたか。(ノート) ○それぞれが読み取ったことをもとに意見を交換させる。 ○小グループで話し合ったことを、全体に広めるようにする。 ☆叙述を根拠に自分の意見を伝え合わせる。	
4 本時の学習をもとに、自分の物語を考える。	5 (個別)		創作メモ

(ウ) 授業改善の事例 (算数)

学習活動と内容	時配 (形態)	○指導上の留意点◎評価☆仮説との関わり	資料
<p>1 本時のめあてを確認する。 ◇問題を把握する。</p> <p>おはじきが右のようにならないで います。 あゆみさんは次のような式で求め ました。 <math>4 \times 4 + 3 \times 3</math></p> 	<p>7 (一斉)</p>	<p>○問題把握を容易にするために、図を 掲示し、視覚的にとらえさせる。 ○何を求めるのかの確認をし、意欲 的に問題解決に取り組ませる。 ○かけ算の「何個分×いくつつ分」に目 が向くように、既習事項を想起させ る。 ○「式をよむ」という用語を確認す る。</p>	<p>図 おはじき プリント</p>
<p>式を図を使って説明するにはどうしたらよいだろうか。</p>			
<p>2 見通しをもつ</p>	<p>3 (一斉)</p>		
<p>3 自力解決する。 ◇図に表現し、説明する。</p> <p>4 自分の考えを伝え合う。 ◇グループで考えを伝え合う。 ・自分のかいた図が式とどのように対応 しているのかを説明する。</p> <p>5 全体で話し合う。 ◇発表ボードをもとに、共通点や相違 点について話し合う。</p>	<p>10 (個別)</p> <p>7 (グループ)</p> <p>7 (一斉)</p>	<p>○自分の考えを書くことに戸惑って いる児童には説明文章の穴埋め形 式のヒントカードを活用する。 ☆式をよみ、自分の考えをもつこと ができたか。(ノート) ○グループを作り、考えを伝え合う。 考え途中の児童は、途中までの説 明でもよいことを伝え、書き足す ようにさせる。 ○友だちの考えを聞いて、分かった ことは書き込ませる。 ☆友だちとの伝え合いを通して、一 人では解決できなかった部分を理 解することができたか。 ◎式と図を結びつけその理由を説明 することができたか。(発表・ノート) ○発表カードに図を書き込ませなが ら確認させる。</p>	<p>ワーク シート(式 別) ヒントカ ード</p> <p>発表ボ ード</p>
<p>同じ数のまとまりを考えればいい。</p>			
<p>6 本時のまとめをする。 ◇学習を振り返り、まとめをする。</p>		<p>○全体で本時のキーワードを確認する。 ○同じ数のまとまりに目を向けるこ とを確認する。</p>	

イ 少人数指導プロジェクトチームの実践

25年度に、少人数指導担当・学習サポーターでプロジェクトチームを立ち上げた。

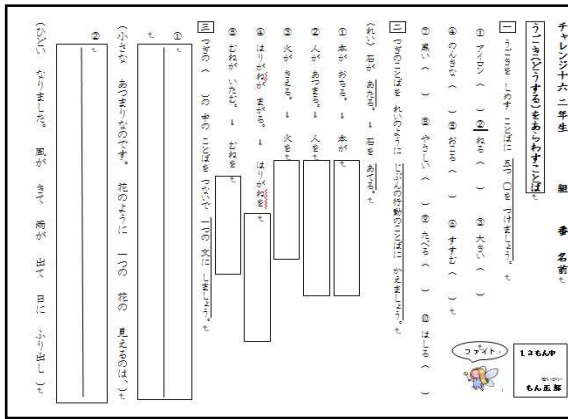
(ア) チャレンジプリント (週末宿題) の作成

週末にオリジナルの宿題プリントを全校児童に配布している。このチャレンジプリント(資料1, 2)は、学年の発達段階に応じ、記述式で解答する設問を設けている。

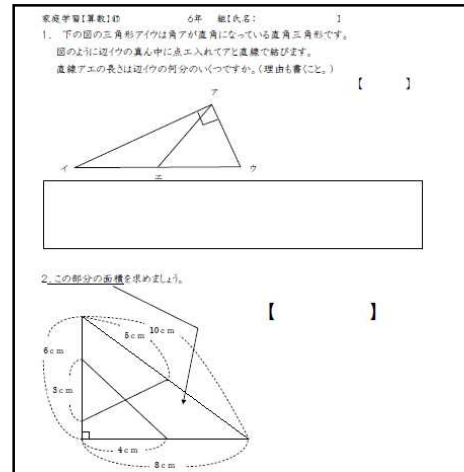
週末に配付されたチャレンジプリントは、月曜日に学級担任が回収し、プロジェクトチームが採点を行っている。採点後は児童に返却し、解答例等を掲示している。27年度からは、「ちばっ子チャレンジ100」や「学びの突破口ガイド」も活用している。

(イ) 補習学習の実施

毎週火曜日の放課後に4年生以上で、やや学習が遅れがちな児童に対して行っている。使う教材は、学年の枠を取り払ったプリントで、内容は算数が中心である。児童は約10名が参加し、おおよそ児童3名に対して1名の指導となる。



資料1 チャレンジプリント 2年国語



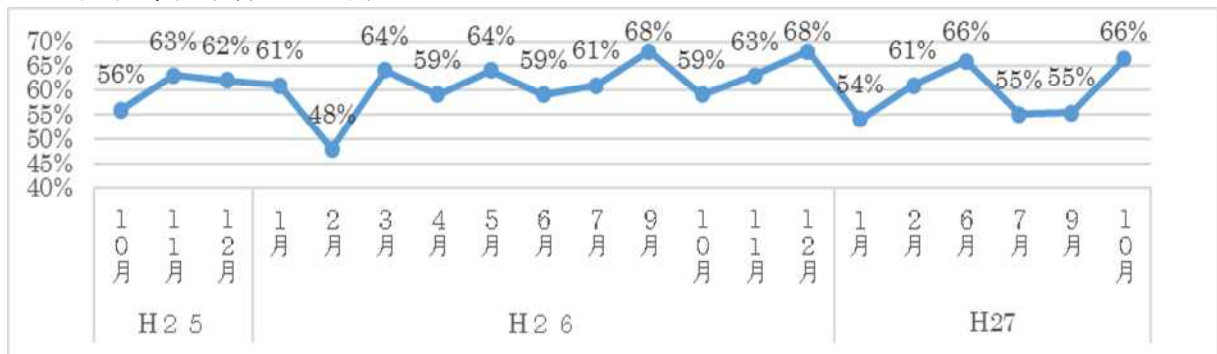
資料2 チャレンジプリント 2年算数

(ウ) ヒントカード、発展問題及び掲示物の作成

授業で活用するヒントカードや適用問題、掲示物などを作成し、授業を通して改良を続けている。

ウ 家庭学習の強化

(ア) 家庭学習重点週間



「10分×学年+α」の家庭学習時間を一週間、達成した児童の割合

毎月第2週を家庭学習重点週間に定めている。「家庭学習ふりかえりカード」を配付し、「10分×学年+α」を目標に、保護者に確認印をもらっている。

80%達成を目標に、「全校放送での呼びかけ」「家庭への啓発」「家庭学習の手引きの配付」「よくできている自学ノートを見合う」など様々な手立てを講じている。

エ 生活習慣改善への取組

(ア) 生活習慣アンケート

研究仮説2では、学習・生活習慣をあげた。年2回、アンケートを実施し、分析するとともによりよい生活習慣獲得の契機となるようにしている。

- 1 朝食を毎日食べていますか。
- 2 家の手伝いをしていますか。
- 3 早寝・早起きをしていますか。
- 4 普段(平日)、1日にどれくらいの時間、睡眠をとることが多いですか。
- 5 家の人と学校での出来事について話をしていますか。
- 6 テレビを見たり、ゲームをしたりする時間を話し合って決めていますか。
- 7 普段(平日)、学校の授業以外に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。(学習塾・家庭教師も含む)
- 8 休日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。(学習塾・家庭教師も含む)
- 9 普段(平日)、家や図書館で、1日当たりどれくらいの時間読書しますか。(教科書・参考書・まんが・雑誌は除く)
- 10 家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか。(自主学习)
- 11 学校の宿題を確実にしていますか。
- 12 家で、学校の授業の予習・復習をしていますか。
- 13 新聞やテレビなどのニュースに関心がありますか。

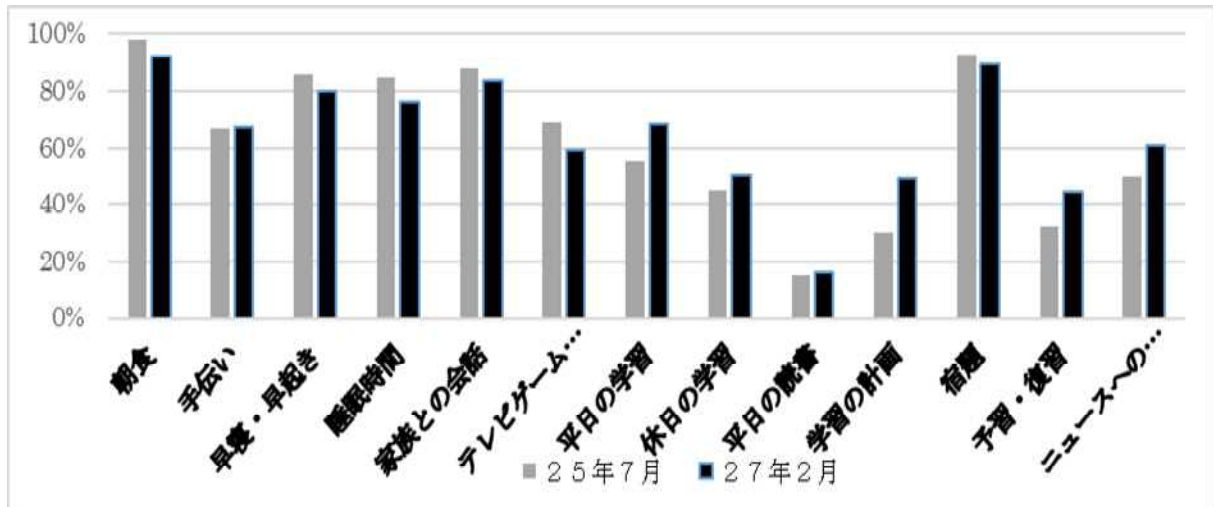
<生活習慣アンケート質問項目(H25~26)>

- 1 朝食を毎日食べていますか。
- 2 家の手伝いをしていますか。
- 3 早寝・早起きをしていますか。
- 4 普段(平日)、1日にどれくらいの時間、睡眠をとることが多いですか。
- 5 家の人と学校での出来事について話をしていますか。
- 6 テレビを見たり、ゲームをしたりする時間を話し合って決めていますか。
- 7 普段(平日)、学校の授業以外に勉強をしていますか。(宿題・予習、復習・学習塾も含む)
- 8 休日に、勉強をしていますか。(宿題・予習、復習・学習塾も含む)
- 9 普段(平日)、家や図書館で、1日当たりどれくらいの時間読書しますか。(教科書・参考書・まんが・雑誌は除く)
- 10 新聞やテレビなどのニュースに関心がありますか。

<生活習慣アンケート質問項目(H27)>

## 山武市立成東小学校

経年変化では「学習時間」「学習の計画」「予習・復習」「ニュースへの関心」において伸びが見られた。逆に「朝食の摂取」「早寝・早起き」「睡眠時間」「テレビゲームの時間」などは下降傾向が見られる。



<生活習慣アンケート 25年7月（1回目）と26年2月（4回目）の比較>

### オ 学習規律の徹底・学習環境の整備

#### (ア) 姿勢・鉛筆の持ち方・「ハイ」という返事

「学力の定着は学習規律から」を念頭に学習中の姿勢を整えることを全校共通で指導している。加えて、鉛筆の持ち方、指名された際の「ハイ」という返事も徹底させている。

#### (イ) 話すとき、聞くときの「あいうえお」「かきくけこ」

「聞く」際に意識すること、「話す」際に意識することを掲示している。

<p>あいてのきもちを わかってほしい いっしょうけんめい うなずいて えがおで おわりまで きこう</p>	<p>かおをみて きこえるこえで くちをおおきくあげて けつろんをはっきりと こころをこめて はなそう</p>	<p>あいての気持ちを わかってほしい いっしょうけんめい うなずいて えがおで おわりまで きこう</p>	<p>かんがえをまとめて きく人の立場になり じゅんじょよく けつろんは先に伝え ことばをはっきりと はなそう</p>
--	---	--	---

<1～3年生用>

<4～6年生用>

#### (ウ) 廊下掲示等の工夫

校内のあらゆる場所を学力向上のための手立ての場として活用し、学習のテーマパーク化を目指している。

廊下に日本地図や世界地図を掲示し、最近ニュースになったことなどについて、付箋で場所を示している。

また、小黒板やマグネットを貼ることができるホワイトボードを設置し、児童が遊びながら学び合える場を設けている。

### カ 「書くこと」の日常化

- ・ 授業の終わりに自分の言葉でまとめを書く
- ・ 授業の感想を書く
- ・ 社会科見学等、校外学習後のまとめ
- ・ 学習等でのまとめ
- ・ 理科の観察
- ・ 社会科新聞や理科新聞（単元のまとめ）
- ・ 外部講師等へのお礼の手紙
- ・ 帰りの会等での日記



<地図上に付箋で示す>

上記の活動に対して、指導法の工夫・手立てを明らかにした。



<授業に関する工夫・手立て>

- ・ 国語の単元のゴールに書く活動を多く設定
- ・ 様々な言葉を使つての短文作り
- ・ 具体的に書けるよう理由や気持ちなどを書かせる
- ・ 見本を見て、真似をして書く

<機会の工夫・手立て>

- ・ キーワードを使って、授業のまとめを書く
- ・ 日記を書く

<テスト等での工夫・手立て>

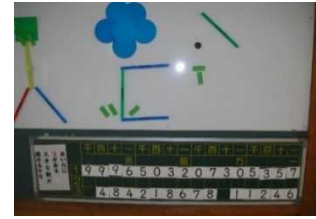
- ・ 添削する際に具体的に直す点を各自に示す
- ・ テスト等で、問いに対応しない場合は誤答として扱う

<形式の工夫・手立て>

- ・ 文字数や行数を指定する
- ・ マス目や枠があるものは最後まで書かせる
- ・ 社会科新聞や理科新聞作成の際に、あらかじめ評価基準を示す

<読みとの関連>

- ・ 朝の会での音読活動(月末には暗唱)
- ・ 朝の読書で並行読書を推奨



<ホワイトボードと小黒板>

様々な機会に「書かせる工夫・手立て」を講じて、「書く」能力の伸長をはかっている。この工夫・手立てが学力・学習状況調査での「記述式問題」への得点の高さにつながっている。

(3) 検証事業サイクル (PDCA サイクル)

本校の PDCA サイクルの経過を以下に示す。

平成 25 年度	P	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 研究主題・研究の目標・仮説 1, 仮説 2 の作成</li> <li>・ 研究教科に国語と算数を位置づけ</li> <li>・ 少人数指導プロジェクトチームの立ち上げ</li> </ul>
	D	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 千葉県教育委員会作成「『思考し表現する力』を高める実践モデルプログラム」を活用した授業実践</li> <li>・ 全学級担任が, 2 回以上の研究授業(1 回は指導主事による指導)</li> <li>・ 家庭学習重点週間の実施</li> </ul>
	C	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 全国学力・学習状況調査</li> <li>・ 学力向上交流会 (平成 25 年 11 月 13 日)</li> <li>・ 家庭学習重点週間の分析</li> <li>・ 生活習慣アンケート</li> <li>・ 千葉県標準学力検査</li> </ul>
	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「伝え合い活動」をより効果的に高める手立てについて検討</li> <li>・ 児童の学力状況について共通理解する研修の実施</li> <li>・ 『実践のまとめ』を作成</li> </ul>
平成 26 年度	P	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 研究主題, 研究の目標は平成 25 年度を継続実施</li> <li>・ 研究仮説 1 を改定 「自分の考えを持たせ, 伝え合う活動を充実させれば, 児童の思考力や表現力が高まり, 学力が向上するだろう」</li> </ul>
	D	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 全学級が指導主事を招いての仮説検証授業</li> <li>・ 家庭学習重点週間の実施</li> </ul>
	C	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 全国学力・学習状況調査</li> <li>・ 家庭学習重点週間の分析</li> </ul>
	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 児童の学力状況について共通理解する研修の実施</li> <li>・ 家庭学習の工夫の呼びかけ</li> </ul>
	P	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「伝え合い活動」への手立ての工夫の確認</li> </ul>
	D	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 公開研究会での授業展開 (平成 26 年 11 月 28 日(金))</li> </ul>
	C	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学力向上交流会(茂原中)で発表, 本校の取組についての意見交換</li> <li>・ 公開研究会において本校の取組についてのパネルディスカッション</li> <li>・ 生活習慣アンケート</li> <li>・ 千葉県標準学力検査</li> </ul>
A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ICT を活用した「知識」問題強化の取組の確認</li> <li>・ オリジナルの漢字課題の作成</li> <li>・ 生活習慣改善への呼びかけ</li> <li>・ 『研究紀要』を作成</li> </ul>	

平成 27 年 度	P	<ul style="list-style-type: none"> <li>生活習慣アンケートの改定</li> <li>25年度から引き続き研究目標，平成26年度改訂の研究仮説を継続</li> </ul>
	D	<ul style="list-style-type: none"> <li>仮説検証のため，指導主事を招いての研究授業。</li> <li>家庭学習重点週間の実施</li> <li>ICTを活用した授業研究</li> </ul>
	C	<ul style="list-style-type: none"> <li>全国学力・学習状況調査</li> <li>教師の「書くこと」への手立てについて調査</li> <li>学力向上交流会(芝山中)で発表，本校の取組について意見交換</li> </ul>
	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童の学力状況について共通理解する研修の実施</li> <li>ICT機器の操作の確認</li> </ul>
	P	<ul style="list-style-type: none"> <li>ICT機器を活用した授業プラン</li> <li>「伝え合う」ために考えを書かせることの再確認</li> </ul>
	D	<ul style="list-style-type: none"> <li>仮説検証のため，指導主事を招いての研究授業</li> <li>ICT機器を活用した「伝え合い活動」を取り入れた研究授業</li> </ul>
	C	<ul style="list-style-type: none"> <li>生活習慣アンケート</li> <li>千葉県標準学力検査</li> </ul>
	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>『研究紀要』を作成</li> </ul>

### 3 取組の成果と課題

#### (1) 成果

##### ア 記述式問題や活用問題での得点の高さ

授業の「深める」場面において，自分の考えを持って「伝え合い活動」ができるような手立てを検証してきた。また伝える側と聞く側の視点を持たせることも意識して指導している。さらにどの場面が効果的なのか，伝え合いのよさが生かされる場面も検討してきた。その結果，児童は，「自分の考えをまとめる」「ノートに自分の考えを記述する」ことが日常的になり，書く能力が向上したと考える。

##### イ 「知識」問題の得点の上昇

漢字の習熟が低い傾向が全国学力・学習状況調査の分析から明らかになり，漢字を意識した授業，反復練習の取組，ちばっ子チャレンジ100の活用，オリジナルプリントの実施，eライブラリーの活用等，手立てを講じた結果，改善の兆しが見えてきた。

##### ウ 家庭学習の取組の定着

家庭学習重点週間，生活習慣改善の呼びかけが功を奏し，家庭学習への取組率が上昇した。保護者の意識も向上していることが生活習慣アンケートからもわかる。

##### エ 少人数指導プロジェクトチームの能動的活動

チャレンジプリントの作成，指導教材の作成，補習等を継続したことが学力向上につながった。

#### (2) 課題

##### ア 「知識」問題，特に小数点のある計算

改善傾向が見られるものの，「小数点のある計算が苦手」ということを，学校全体で共有して指導にあたる必要がある。

##### イ 家庭学習の更なる強化

「10分×学年＋α」の達成率は60%前後である。80%以上の達成を目標に，手立てを検討していく必要がある。

## 「学力・学習状況」検証事業研究成果報告書

1 研究主題 確かな基礎学力を身につけ、生き生きと学ぶ児童の育成をめざして

### 2 研究の概要

#### (1) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴と分析

平成25年度の調査では全国平均と本校の平均正答率を比較すると、国語A・B、算数A・Bの全ての領域に課題があり、どちらの教科においても特にA問題（知識）に課題があった。平成26年度の調査では、国語A、算数Aでは大きくスコアが上昇したが、国語B、算数Bでは依然として課題が残った。平成27年度の調査では、国語A・B、算数A・Bの全ての領域に課題があった。

過去3年間の結果を分析すると、特に国語の「書くこと」の領域や国語・算数共に「記述式」の問題形式に課題があることが分かった。

#### (2) 平成23年度～平成26年度までの千葉県標準学力検査【算数】の比較

(学年は平成26年度現在)

検証事業開始以前の平成24年度と平成26年度の算数の結果を標準得点で比較すると、5年生を除いた3つの学年でスコアが伸びている。特に、3・4年生(中学年)のスコアの伸びが大きく、全ての観点でスコアの上昇が見られた。また、平成25年度と平成26年度を比較すると全ての学年でスコアの上昇が見られた。

6年生の結果を見ると、「数学的な思考」や「技能」での伸びは見られなかったが、「知識・理解」では伸びが見られ、その結果、算数全体の標準得点の伸びが見られた。基礎基本の定着をめざしてきた取組により知識・理解面が向上し、それが標準得点の上昇に結びついたのでないかと考えられる。

#### (3) 国語【書く力】の結果の推移(学年は平成26年度現在)

「書く力」を高めるための取組を始める以前の平成25年度と取組を始めた平成26年度を比較すると、3・4年生に関してはスコアの上昇が見られたが、5・6年生はスコアがやや下降した。今年度より市教委作成の言語ワークをチャレンジタイムなどで活用するなど新たな取組を始めているが、さらに「書く力」を高めるための取組を進めたい。

#### (4) 学力向上のための取組

本校では、平成25年度より学力・学習状況検証事業研究協力校の指定を受け、全国学力・学習状況調査を活用し、学力向上をめざした実践に取り組んでいる。特に基礎基本の定着を図るための取組を中心に実践を行っている。

① 基礎学力テストの実施

漢字の読み書き，計算について学年ごとに自作のテストを行い，基礎基本の定着状況を把握するとともに，家庭学習に取り組むきっかけとしている。年に4回，全校同一日に実施して，より確実な基礎基本の定着をめざしている。



基礎学力テスト実施の様子

② 放課後の補習(若葉塾)の実施

平成25年度は，算数において基礎基本の定着が十分でない5・6年生の児童を対象にスキルアップドリルやちばっこチャレンジ100を用いて放課後の補習を実施した。平成26年度は，3年生にも枠を広げ，毎週木曜日の放課後に3～6年生を2部に分けて補習(若葉塾)を実施した。今年度は，2年生にも枠を広げて2～6年生で実施している。(部活動が全て終了する12月からは，週4回実施)また，若葉塾の実施にあたっては，学習サポーターや学生ボランティアなどの学校支援ボランティアも活用して，指導にあたっている。



スキルアップドリル

③ 夏季休業中に学習相談を実施

夏季休業中に3～6年生を対象に学習相談日を設け，算数の基礎基本の確実な定着を目指し，全職員で指導にあたっている。今年度も基礎基本の定着が十分ではない児童にしばり実施した。今年度は，約60名の児童が参加し，学習に取り組んだ。

④ チャレンジタイムの実施

昨年度より毎週木曜日の朝自習の時間を「チャレンジタイム」とし，全校一斉に100マス計算などのプリントを行う時間を新たに設けている。100マス計算などに取り組むことにより，集中力や計算力を養っていく。また，学力・学習状況調査の結果から「書く力」に課題がみられるので，200字作文等に取り組ませている。

⑤ 自主学習コーナーの設置

職員室の近くの廊下に自主学習コーナー「ガンバろう下」を設置し，休み時間や放課後に子ども達が自由に自主学習できるコーナーを設けている。学習に取り組もうとする雰囲気作りを行い，職員室にいる職員で児童の質問に答えるなど，児童に対する個別の学習支援を行っている。

⑥ 成績優秀者の表彰

千葉県標準学力テストにおいて成績上位者(全学年各教科90点以上)の

表彰を修了式で行っている。（平成25年度の表彰者は約100名，平成26年度は140名）本校児童の実態から意欲付けを図るための一助として取り組んだ。

⑦ 学習推進便りの発行

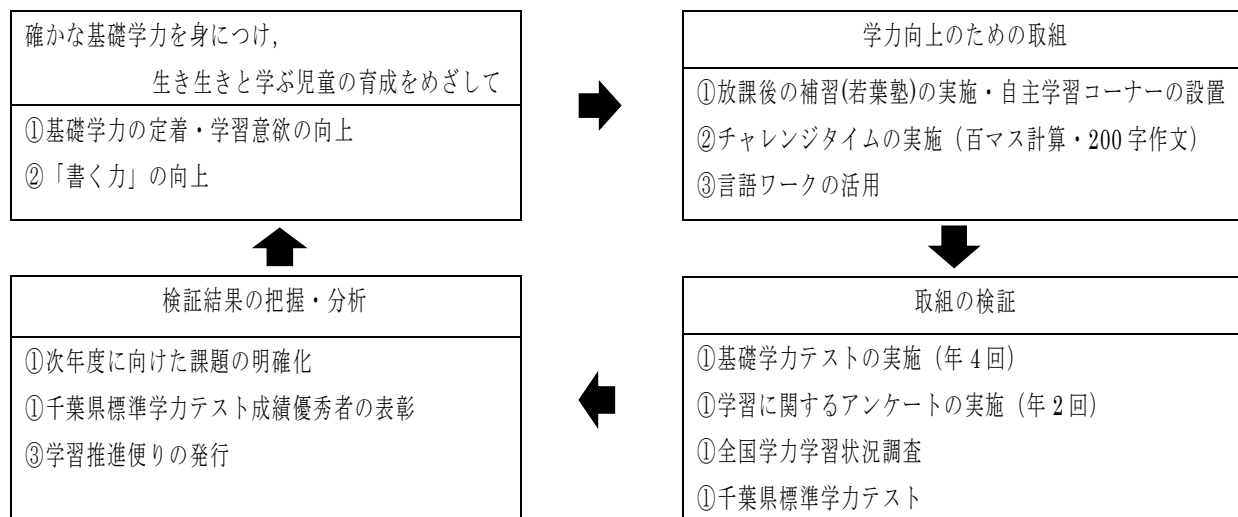
平成25年度には，個人面談の際に家庭学習のすすめを配付し，家庭でも学習習慣を身に付けてもらえるよう保護者に呼びかけを行った。しかし，大きな効果は見られなかったため，保護者にもっと学校での学習に関心を持ってもらいと考え，若葉小の学力向上に関する取組や学校での学習の様子などを中心に学習推進便り「学力向上」を発行している。

⑧ 中学校との連携

中学校との連携強化を図るため，合同の生徒指導 会議や教務主任会議を行っている。また，合同教科部会（2回）や相互授業参観等も実施し，小中のつながりを意識した授業や生徒指導の方法を検討し，実践している。6年生は，特に中学校との連携を意識し，中学校の教師による出前授業（ガイダンス・数学・英語）を行ったり，中学校と同じ学習の約束（「授業の約束3箇条」）を掲示したりして中学校進学を意識させている。

（5）検証改善サイクル

①平成25年度より実施 ②平成26年度より実施 ③平成27年度より実施



4 成果(○)と課題(●)に対する今後の取組

- 平成24年度と平成26年度の千葉県標準学力検査の算数の結果を比較すると，全体のスコアは伸びているので，基礎基本を定着させていくための基礎学力テストや放課後の補習（若葉塾）といった取組は今後も継続していく。

- 「ガンバろう下」や千葉県標準学力検査の成績上位者の表彰を行うことで、学校全体が学習に取り組んでいこうという雰囲気広がってきている。
- チャレンジタイムでは、集中して学習に取り組む姿勢や早く正確に問題を解こうとする姿勢が見られるようになってきた。
- 国語の記述式の問題や書くことの領域では、全国平均を下回っているので、普段から文章を書くことに慣れるような活動を行っていく。児童質問紙からも、文章を書くことに抵抗を感じている児童が多いことがわかるので、チャレンジタイムなどを活用し、200字作文等に取り組みせ、普段から文章を書く練習を行い、文章を書くことへの抵抗感をなくしていきたい。
- 子どもの学習に対する保護者の関心が低いので、保護者を巻き込んで学力向上の取組を進めていきたい。